日本バドミントン協会

バドミントン界

●創刊号
1969
august

THE BADMINTON WORLD

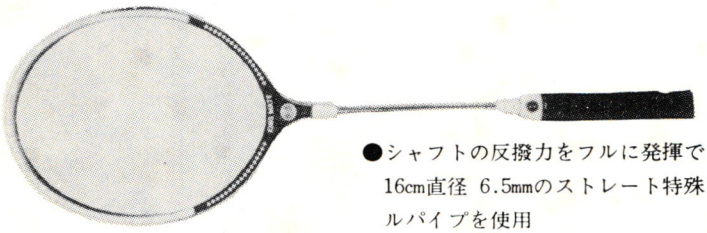
ユーバー杯特集号

日本、女王の座まもる!



新製品 No.3500 キングメイト

KING MATE



●シャフトの反撥力をフルに発揮できる全長16cm直径 6.5mmのストレート特殊スチールパイプを使用

●小銀杏構造と輸入木材を基にした革命的な特殊合板でバランス、耐久力は抜群

サンバタ

株式会社 諸江製作所 東京都渋谷区笹塚2丁目46番8号 電話(377) 4401(代表)

新発売

今度はシャフトがアルミになりました



NO. 8000 *Alumina Hy-Power*

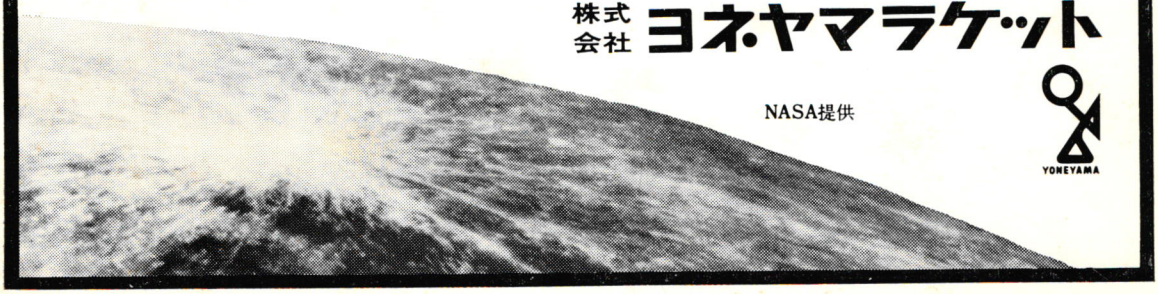
アルミナハイパワー

軽い
アルミニウム合金の比重は約2.7で、銅の8.9や鉄の7.9に比べて1／3に過ぎず、非常に軽くリストの弱いプレーヤーに向きます。

強い
特殊製法によりアルミニウム合金をラケットフレームに用い、鋼鉄に匹敵する強さが発揮されました。

弾む
木製、スチール製に比較して柔軟性、反撥力が抜群。打球の初速が早く、更に加速が増加してすばらしいスマッシュが打てます。

株式会社 ヨネヤマラケット



NASA提供

YONEYAMA

栄冠と心の陰影と
ユ杯を手にした高木主将

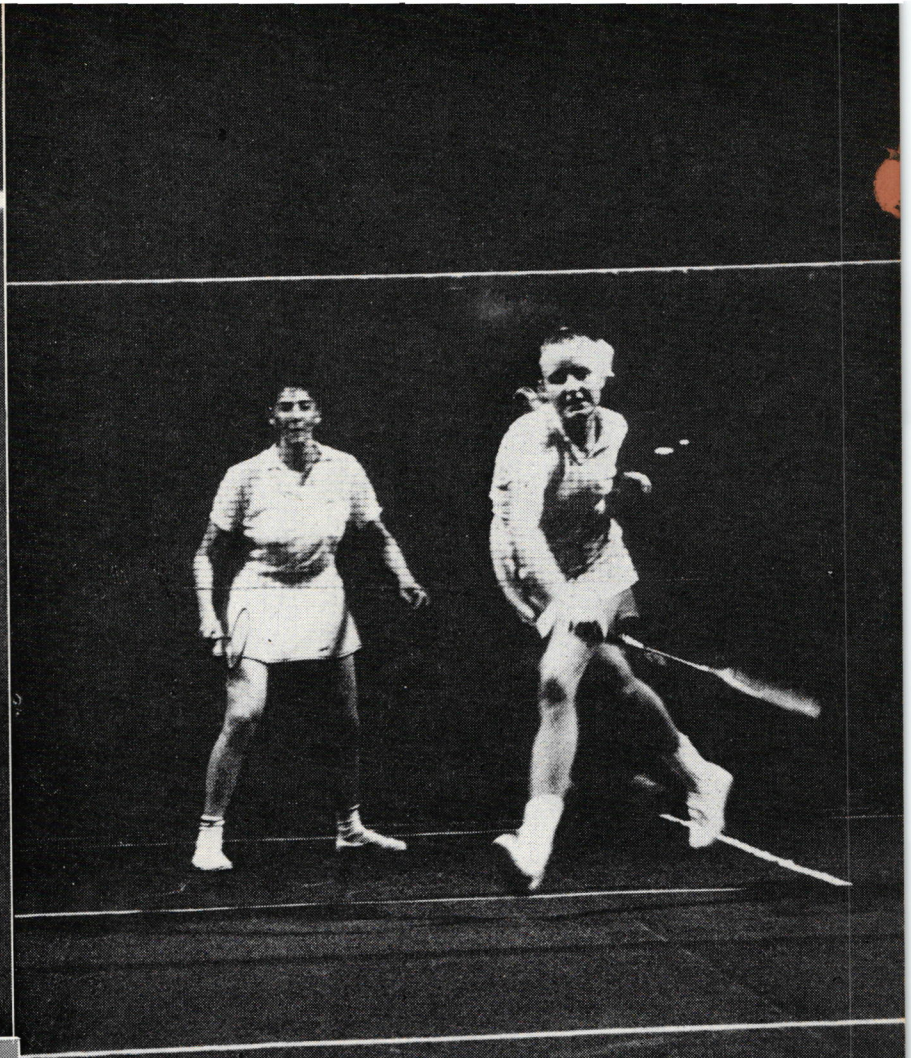


この写真を見て、高木自身がなんと思うだろうか。

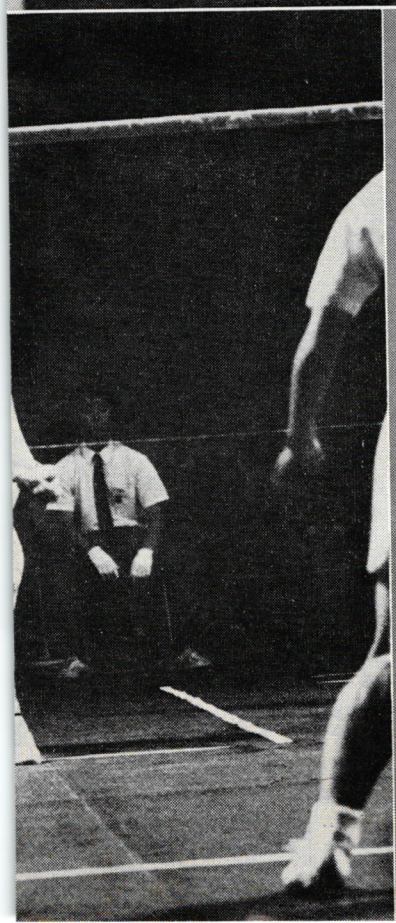
この表情、じつに複雑、一万余の大観衆のなかで、栄冠にいろどられ、割れるような拍手と歓声につつまれながら、彼女は笑っても、泣いてもいない。

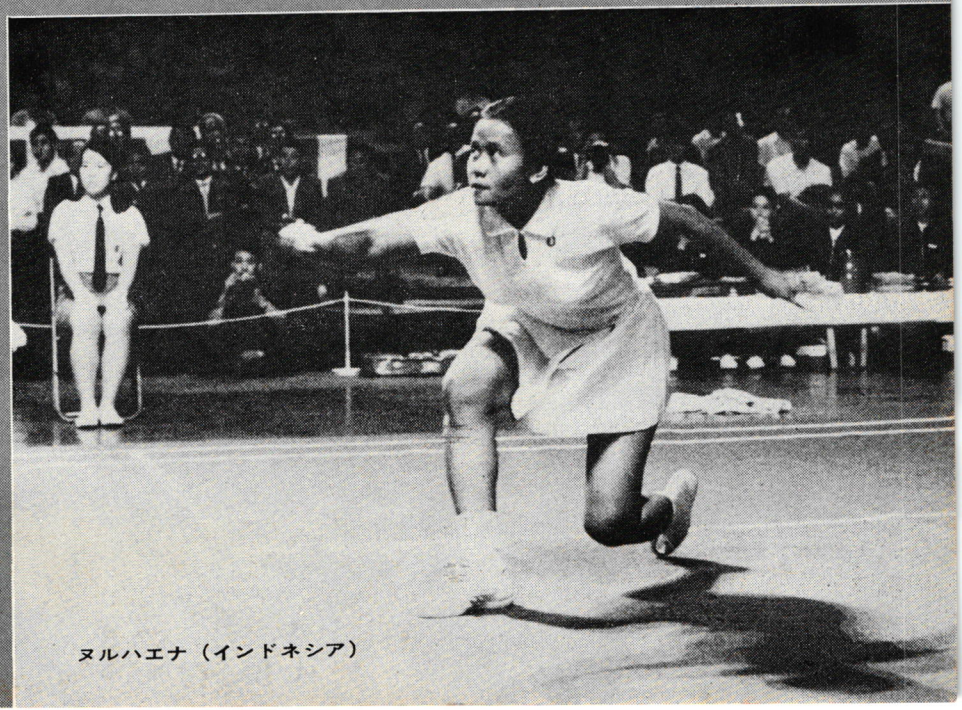
この一瞬に、彼女の脳裡をかけめぐっているものはなにか。〝心のヒダ〟の陰影を、そのまま、うつし出したような、この表情、それは、やはり日本人ならではの、ものであろうか。



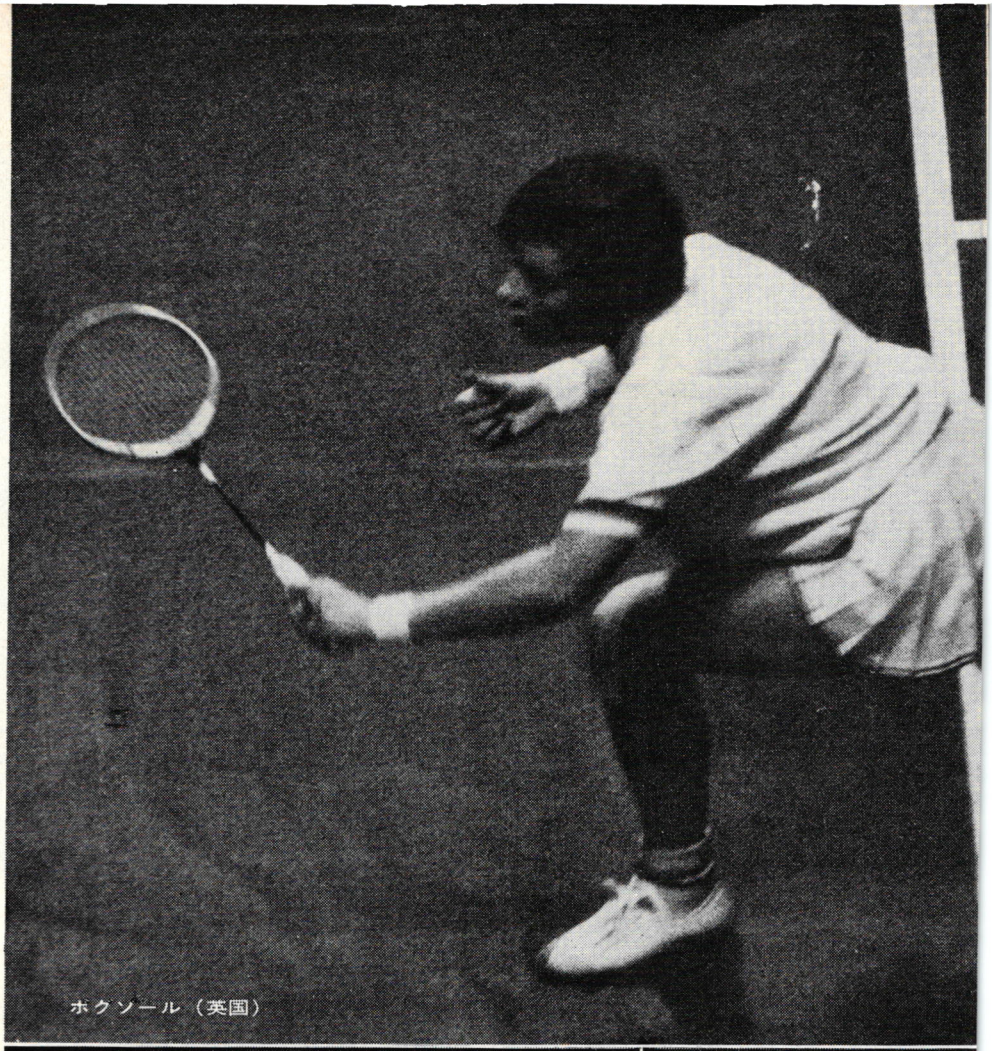


ペリン（右）とリカード　英国ダブルス





ヌルハエナ（インドネシア）



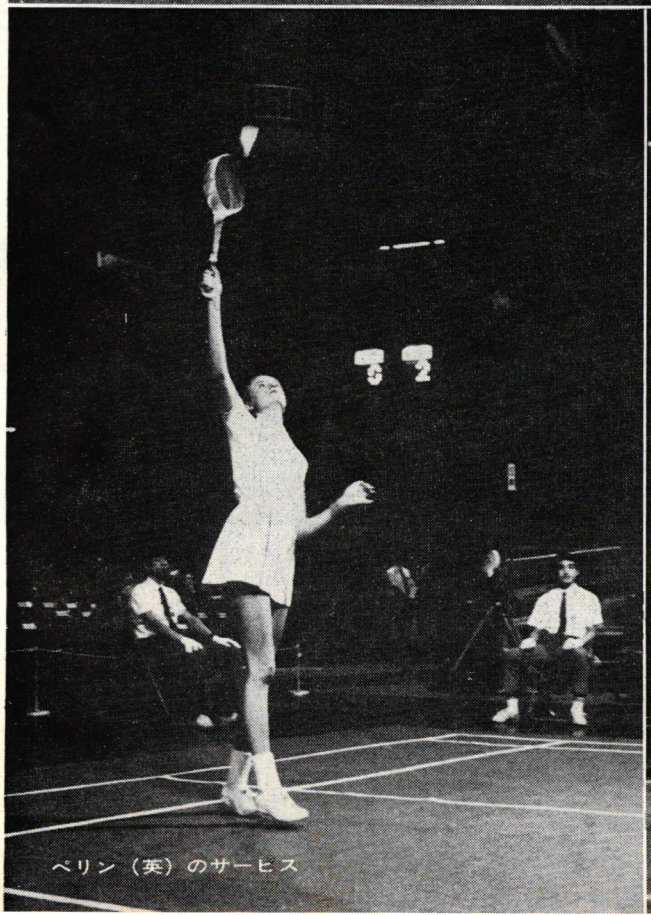
ホクソール（英国）

理にかなったフォームは美しい、いや、美しいフォームは理にかなっている――と話はどちらにせよ、人生のなにかに賭けるとき、人はすべて美しく見えるものだ。そして、また、その一瞬に、人はたくまずして、おのれの〝知らざる性格の一面〟を、私たちの前にさらけ出す。

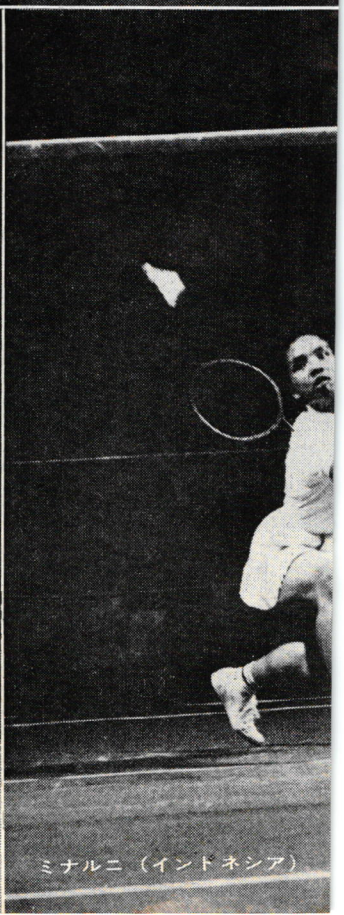
第五回ユーバー杯世界女子選手権大会（インターゾーンとチャレンジ・ラウンド）は、六月八日から十四日まで、東京・千駄ケ谷の東京体育館で開かれ、日本がインドネシアの挑戦をしりぞけて二連勝、初防衛に成功した。

日本の強さについては、あらためていうまでもないが、負けたとはいえ〝東京の空の下〟につどった、インドネシア、英国米国、タイ各国の選手たちのプレーのなかにも、ハッと息をのむシーンの数々があった。

ごらんの写真が、その名場面かどうかは、推察におまかせするとして、まずはおたのしみのほどを。



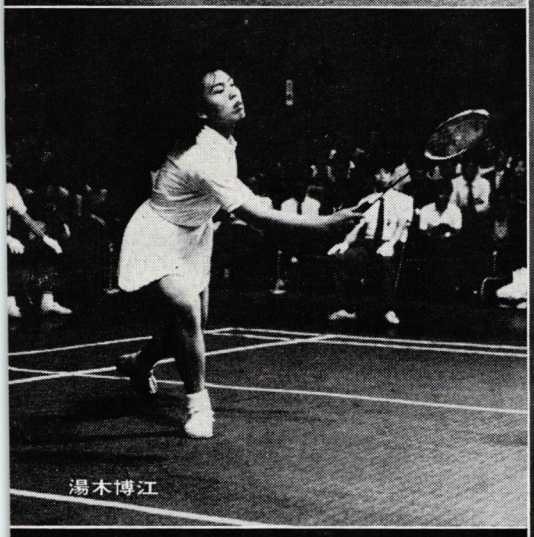
ペリン（英）のサーヒス



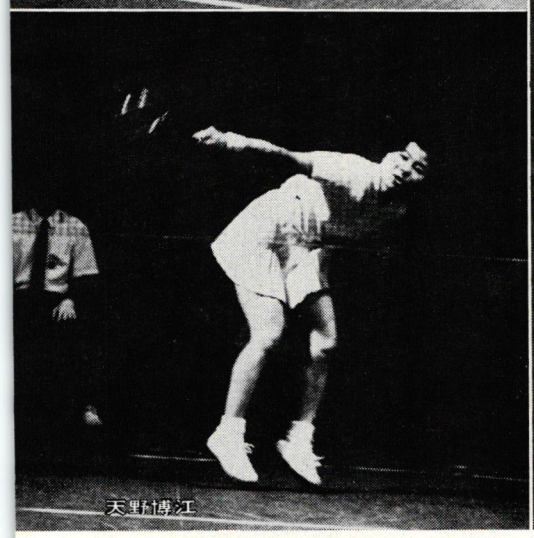
ミナルニ（インドネシア）



高木紀子



湯木博江



天野博江



高橋とも子

ラケット競技の打球の初速はタマの大きさや重さに、あまりかかわりなく、だいたい時速二百キロ近いという。

つまりは〝新幹線〟なみのスピード、もちろん男子と女子では多少ちがうが、ことバドミントンに関するかぎり、日本の女子のなかには、やはり時速百八十キロ、ツボにはまったときには、男子学生でもレシーブできないような、強打の持ち主もいるとのこと。

大会に参加した〝青い目〟のお嬢さんたちにいわせると「日本チームは、自分のため、でなく〝日の丸〟を背負って、コートに立っている」そうだ。

もし、こうした〝執念〟が打球にこめられているとしたら、その一打、相手の心臓までも射抜くであろうことは、想像にかたくない。

いまはなつかしい〝やまとなでしこ〟ということば、硬軟両様に使われるらしいが、このある一面、いまもユ杯の彼女たちの熱い血のなかに脈打っている。

輝かしき門出を祝って

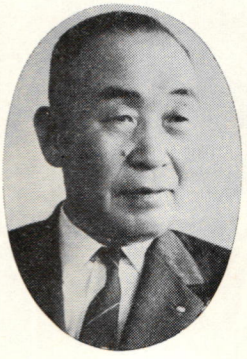
ユ杯大会に展開されました万来の拍手と歓声に接し、百万人のスポーツ、バドミントンの源ここにありと改めて痛感したしだいであります。

あの快挙を目のあたりにするにつけ、今日まで推進してこられた各位の不断の努力に対し深甚なる敬服と感謝の意を表せざるを得ないのであります。

ご承知のように、内外の諸情勢は常に競争の日々であり、こととさらに、現在の世界は、混迷のベトナム戦争をはじめ、ポンド、フランスの通貨不安、ドル防衛等の試練をうけつつあり、一方、国内では金融引き締め、資本の自由化をめぐる攻防、産業の再編成等に直面、これらの競争に打ち勝つため、日頃、多忙をきわめる諸氏が、業務、生活の余暇をさかれて、スポーツに励み、アマチュア精神の高揚につとめ、ひいてはバドミントン界の発展に寄与されたことがユ杯大会における開花結実の歴史的壮挙を成し遂げたのであります。

この輝かしい未来につながる栄光あるスタートを、より強く大きくはぐくむことのために、この「バドミントン界」がすみやかに発刊されることとなりましたのも、また誠に有意義なことと思うわけであります。

バドミントンが広く正しく理解されるため、本誌の責任もまた重大であります。その組織、機構、内容においても、じゅうぶんなる配慮のもとに、目的達成を確実ならしめるよう留意する決意であります。



さいわいにして、関係各位のご支援も得、日本晴れの船出号をお届けできますことは、はなはだ欣快とするところであります。ご期待いただきたいと存じます。

日本バドミントン協会
会長　本田弘敏

創刊号目次

≪写真グラフ≫　栄冠と心の陰影と……1
おお、もうれつ！……37

≪特集　1≫　熱戦の記録
★英国、タイに完勝……8
★インドネシアが挑戦国に……10
★観戦記……11・13
★審判の目……33
★インドネシア、米国を一蹴……9
★日本、女王の座守る……12
★戦評……8・9・10・12
★ＯＢの目……33
★親善試合……35

≪特集　2≫　われら、かくたたかえり
★大任をはたして……7
★スポット（インタビュー）高木紀子、天野博江……16・17
★第三次防衛はもう始まった……15
★ユ杯日誌……14
★選手団手記から……14
★カエルの一年……19
★選手団体調表……31

≪特集　3≫　ユ杯成功への援護射撃
★素顔のヒロイン……28
★日本はなぜ強かった……30
★期待される二人の素材……32
★ユ杯に見たお国ぶり……29
★次代のホープたち……31

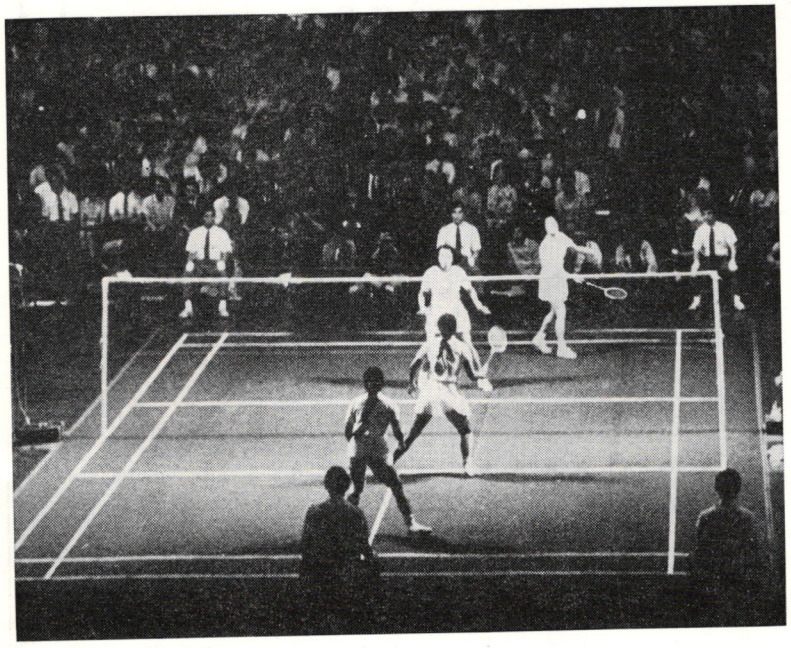
大会の苦労と思い出……24
総裁妃殿下とユ杯……34
わたしもひとこと……34
ヘアピン……11
ユ杯アラカルト……23
発刊にさいして……20
日本選手団名簿……7
大会役員名簿……24
記者クラブ名簿……26
ＩＦ加盟国一覧……25
次号予告……36
編集後記……36

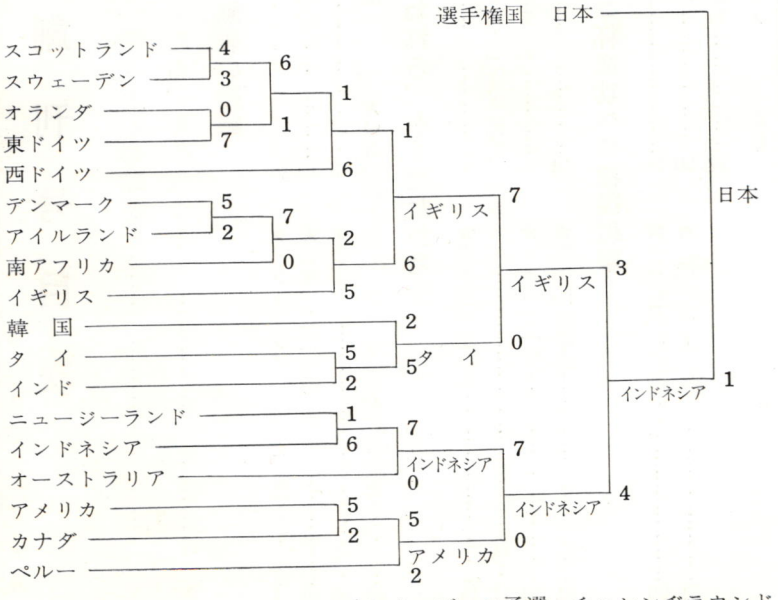
■レイアウト■
表紙撮影　松井　昭
デザイン　小浜　正道
写真撮影　松井　昭
　　山田　真市
　　野口俊二郎
カット　秦　浩
　　新沢　正人

特集1

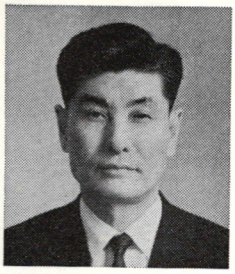
熱戦の記録

日本が輝く二連勝――第五回ユーバー杯争奪世界女子選手権大会は、四大ゾーンの勝者、英国、米国、インドネシア、タイと王座保持国・日本が参加、六月八日から十四日まで、東京体育館で行なわれた。予選にはIF（国際連盟）加盟国48のうち、18カ国が参加した。ゾーン勝者によるインターゾーンでは、予想以上にインドネシアが強く、楽々と挑戦権を獲得した。しかし、日本は前回代表を中心に必勝の布陣で、このインドネシアをも一蹴。六五年に得た王座の初防衛と同時に、二連勝を飾ることに成功した。では、まず、その熱戦の記録から、この大会を振り返り、関係者とともに、その興奮をあらたにしようではないか。





インターゾーン予選　チャレンジラウンド



大任をはたして

日本チーム監督

今井 先

今回の防衛戦に、監督という大役を仰せつかり、無事、その大任を果たし得たのは日本バドミントン協会内外の皆々さまのご支持とご指導のたまもので、その暖かいお励ましがあってこそ、ユ杯をふたたび日本にとどめ得たのであると、しみじみ考えるしだいである。

監督としての私は、いろいろな意味で非常に恵まれていた。

前回、初参加にして初優勝ユ杯を日本へ持ち帰ったチームのうち、四名のプレーヤーが、ふたたび今回のチームに加わり、あらゆる面においてチームのけん引力となってくれたこと。さらに前回の小宮監督、福井コーチが陰に陽に助言を与え、その尊い体験にもとづいて協力してくれたことを、第一にあげたい。

また、今回はコーチのほかにマネジャーも選任され、役員が三名に増員された。

そして一年有余にわたる毛利コーチのすぐれた指導、山本マネジャーの卓越したマネージメントが、九名のプレーヤーの総力を、うって一丸として、チャレンジ・ラウンドのコート上に爆発せしめてくれたのを、私はベンチからまざまざと見ることができた。

強化合宿は、頭初、前回通り六次までを計画したが、プレーヤーの勤務や学業を考え四回に縮少せざるを得なかった。

アマチュアリズムに徹するため、その命題のもとに、各自の心がまえにより、これをカバーした。

合宿不足というコンプレックス、全英大会への選手派遣は想像以上の戦力へのプラスとなったと信じている。ありがたいことであった。

なにしろ、一年半になんなんとする長丁場である。いろいろな雑音が、私の耳にもはいらなかったわけではない。

しかし、川端理事長のあざやかな取り捌きと、森友副会長の親身なアドバイスが、私に勇気を与え、私をふるい立たせてくれた。

とくに最終エントリーとオーダーの編成に当って、具体的なことは、もちろん監督にまかせられたが、その大綱を誤まらず、インドネシアを相手とした場合の最強のメンバーを組み得たことは、まったく、この両氏の精神的なバックアップのたまものである。どんなに感謝しても、感謝しすぎるということはない。

ただひとつの心残りは、若手プレーヤーを、チャレンジラウンドに起用できなかったことである。

第二ダブルスで勝敗が決まったあと、メンバー・チェンジを申し入れたが、インドネシアの受け入れるところとはならなかった。次回大会には主力選手として、三連覇の原動力となってくれることを信ずるのみである。

本田会長のご期待に沿うことができ、秩父宮妃殿下にも喜んでいただいた。こんなにしあわせな気持ちでいて、よいのかしらんとさえ、思うのである。

▼日本選手団名簿▲

▼監督　今井　先（60）二階堂高校教員、協会理事

▼コーチ　毛利清志（43）山陽学園高校教員、協会常務理事

▼主務　山本洋彦（27）慶大出、北辰電機

★　★　★

▼選手　高木紀子（26）主将　日女体短大出、東海女短大教員　第四回大会代表、158センチ

▼選手　天野博江（25）日女体短大出、東海女短大教員、第四回大会代表、156センチ

▼選手　後藤和子（23）新潟中央高出、新潟電話局、第四回大会代表、153センチ

▼選手　高橋とも子（23）日本女体大出、北辰電機、第四回大会代表、159センチ

▼選手　湯木博江（20）山陽学園高出、日女体大三年、161センチ

▼選手　本間恵美子（20）新潟青陵高出、日本女体大三年、159センチ

▼選手　浦口恵子（20）山陽学園高出、日本女体大三年、150センチ

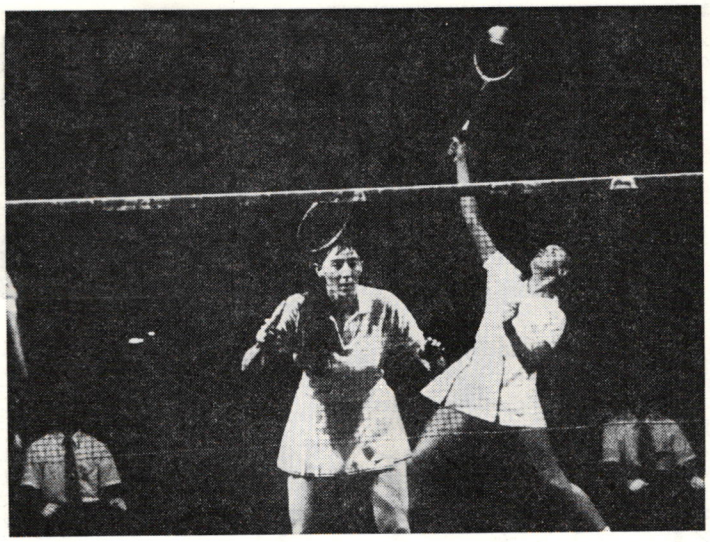
▼選手　相沢マチ子（19）新潟青陵高出、新潟青陵女短大二年、163センチ

▼選手　竹中悦子（19）金沢二水高出、新潟青陵女短大二年　163センチ

―第1日―

英国、タイに完勝

インターゾーン準決勝



イギリス　7（単3―0　複4―0）0　タイ

（6月8日4時、東京体育館、室温25度、湿度37％、観衆4000）

▽シングルス

○ペリン　2（1111―6　11―2）0　キングマン

○ニールセン　2（111110―12　11―6）1　カエントン

○ボグゾール　2（1111―3　11―8）0　チャンクラム

▽ダブルス

○ボグゾール　ウェトナール　2（1515―3　11―5）0　キングマン　カエントン

○ペリン　リカード　2（151115―8　11511―9）1　パタポンス　チャンクラム

○ペリン　リカード　2（1515―8　11―9）0　キングマン　カエントン

○ボグゾール　ウェトナール　2（1515―3　11―5）0　パタポンス　チャンクラム

評

スポーツニッポン　中森康友

バドミントン競技をうんだ英国が、シニセの貫禄十分に攻守とも格段の差で、新興のタイに圧勝した。

テニスのようなストロークやスマッシュのスピードに欠けているものの、体力、技術、試合経験、ゲームのかけ引きとすべてにまさるチーム力を、これほどはっきり見せつけるスポーツはバドミントン以外にはない。

その総合戦力の威力を英国はタイ戦で見せつけた。

シングルス第1試合に登場した英国のエース、ペリンは、挑戦するキングマンを全く問題にしない。

たくみに左右へ打ちわけ相手をゆさぶるストローク、サイド・ラインぎわにぴたりと打ちこむスマッシュの連続は場内を大いにわかせた。

そしてダブルス戦の見ものは世界チャンピオン・ペアのウェトナールとボグゾール組。必死に拾いまくってくいさがろうとするキングマン、カエントンのタイ組に反撃のスキを与えず打ちのめした。

インスタント・ペアの欠陥を暴露したタイの連係プレーのまずさが、よけいに英国のうまさを引きたてたようだ。

暗闇の中でコートだけが電光に浮き上がり、英国選手の派手なミニ・スカートが乱舞する姿は、バドミントンの持つスリルとリズムを強調していたし、このスポーツの新しい魅力を日本人の目にやきつかせたいといってもいい。

＝＝第2日＝＝ インターゾーン準決勝

インドネシア、米国を一蹴

インドネシア　7（単4―3、4―0、複3―0）0　アメリカ

（6月9日4時、東京体育館、室温24度、湿度35％、観衆3000）

▽シングルス

○ウタミ　2（1111―4、7―0）0　オニール

○ミナルニ　2（1111―3、7―0）0　バリナガ

○ヌルハエナ　2（1112―11、4―0）0　ルート

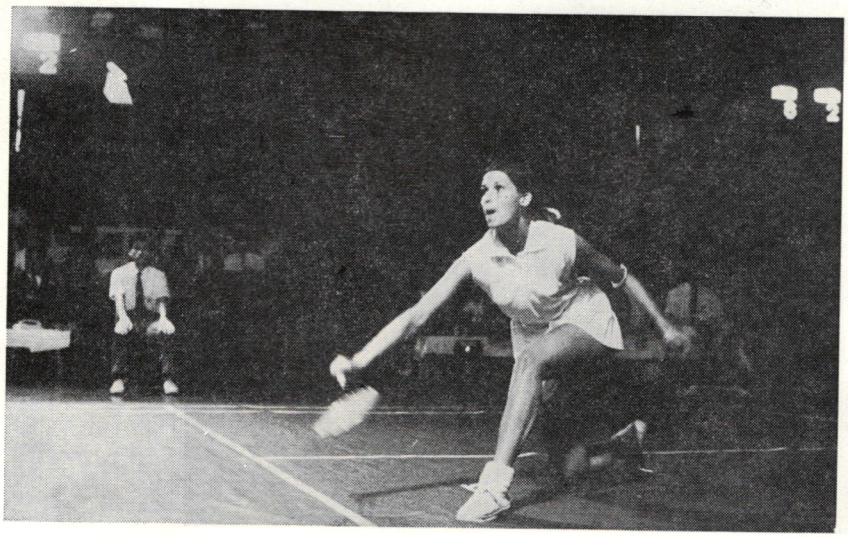
▽ダブルス

○ミナルニ、ヘスティ　2（1515―3、0―0）0　オルストン、スターキー

○ヌルハエナ、ポピー　2（1515―8、7―0）0　バリナガ、レモン

○ミナルニ、ヘスティ　2（1515―3、10―0）0　バリナガ、レモン

○ヌルハエナ、ポピー　2（151512―12、4―1215）1　オルストン、スターキー



オニール（米）けんめいのバックハンドも及ばず、ウタミに完敗。

評

時事通信　沼館義明

インドネシアが完勝した。

インドネシアは第1シングルスで若いウタミ（十七才）がオニールをストレートで破って幸先よいスタートを切った。ウタミは第1ゲーム立ちあがりこそ固さが見られたが、4―4から巧みなプレースメントでオニールを走らせて7ポイントを連取第2ゲームは一方的に打ちまくった。

第2シングルスはエースの対決となったが、ミナルニがバリナガに圧勝した。ミナルニはスピード、プレースメントとも申し分なく、全く危げなかった。とくにドロップ・ショットは鋭角的で、しかもスマッシュと同じフォームから打つので効果的だった。

勝負はこれまで。意気あがるインドネシアは第3シングルスでヌルハエナが勝ち、続く第一ダブルスもミナルニ、ヘスティの新ペアが、オルストン、スターキー組に楽勝、三試合を残してインターゾーン決勝進出を決めた。インドネシアはスピードスタミナで完全に米国を上回りまた試合でわずか1ゲーム落としただけだった。

それにしても、日本に敗れるまでユーバー杯を三回連続保持無敵を誇った米国の凋落ぶりは目を覆うばかり。名手ハッシュマンを欠いたとはいえ、気力でもインドネシアに圧倒されていたのは残念だった。

インターゾーン決勝
インドネシアが挑戦国に
第3日

インドネシアが、主力ミナルニの活躍を足場に、英国に楽勝、大会史上初めて、チャレンジ・ラウンド進出をはたした。両国は実力伯仲とみられていたが、フタをあけると勝負は一方的。これはもっぱら闘志とスタミナの差に原因があったようだ。

インドネシア 4（単2―1 複2―2）3 イギリス

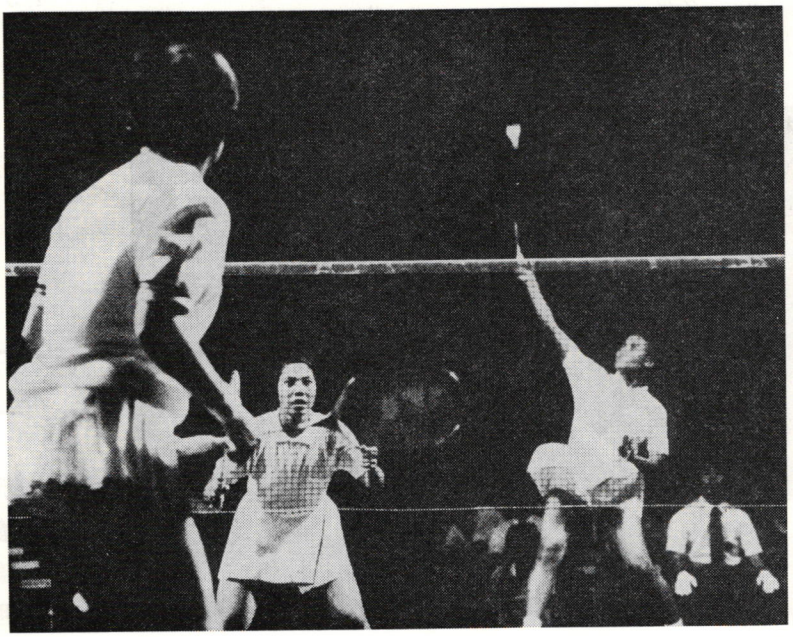
（6月11日4時、東京体育館、室温23度、湿度49％、観衆4500）

▽シングルス

ヌルハエナ	0	(5―11 3―11)	2	ボグゾール○
○ウタミ	2	(11―4 11―10)	0	ニールセン
○ミナルニ	2	(12―9 11―2)	0	ペリン

▽ダブルス

ヌルハエナ ヘスティ	0	(10―8 17―15)	2	ボグゾール ウェトナール○
○ミナルニ レトノ	2	(15―3 15―11)	0	ペリン リカード
○ヌルハエナ ヘスティ	2	(15―3 15―10)	0	ペリン リカード
ミナルニ レトノ	1	(18―17 7―15 キ)	2	ボグゾール ニールセン○



評

スポーツニッポン　中森康友

両国の主力が対決したシングルス第3試合。インドネシアのミナルニは14才で国内選手権に初優勝してデビューし昨年の全英選手権シングルス準優勝。サーブの絶妙なコントロールやドロップ・ショットの威力で世界第一線級の腕を誇る。

一方、長身（1m76）のペリンも強打と軽妙なフットワークを武器に好調を伝えられていた。

だが、ミナルニはペリンのスマッシュを封じる頭脳的なプレーで、ウィークポイントのひざ下を徹底的にねらい打ち。ネットぎわに急角度で落ちるドロップ・ショットでペリンを泳がせ第2ゲームはわずか2ポイントを与えただけ。11―2で圧勝した。

第二のヤマ場となったダブルス戦の第3試合。シングルスに2勝し、3―2とリードしたインドネシアは十八歳のヘスティ二十歳のヌルハエナ組をくり出した。英国側も国内ナンバーワン・ペアのペリン、リカード。

第1ゲーム15―3とインドネシアが奪ったあと、第2ゲームも5オールから7―5、10―8とリードを許さず、ヘスティの

観戦記

読売新聞　小林範夫

チャンピオン日本への挑戦国をきめるインドネシアーイギリスのインタゾーン決勝は、バドミントンの二つのタイプをはっきり見せた試合だった。イギリスは長身を利した変化攻撃、インドネシアはよく動いて、しつようにシャトルに食い下がるねばり型。そして、そのねばりがイギリスの、クリアーとドロップを土台にしたゆさぶり戦法に勝った。

試合は、第一シングルスでイギリスのボグゾールがヌルハエナを簡単に破ったあと、インドネシアはウタミがニールセンをミナルニがペリンに勝ってシングルス2－1とリード。第一ダブルスは全英選手権のチャンピオン、ボグゾール・ウェトナールが組がヌルハエナ・ヘスティ組をくだして2－2。ここで試合はにわかに白熱化した。

しかし、続く第二ダブルスはミナルニ・レトノのベテラン組がペリン・リカードに順当に勝ち、第三ダブルスのヌルハエナ　ヘスティの三人は、そのせいかい気迫と疲れを知らないスタミナにあったといえるだろう。インドネシアは来日前二カ月間の合宿で、午前中二時間も走り、体力をつけたという。エースのミナルニをはじめ、ヌルハエナ、ヘスティの三人は、そのせいかにはげんできたチームとは思えない。お家芸のサーブに集中力がちっとも出ないのはどうしたことか」とけげんな表情だ。

英国の手痛い誤算に、若手の切り札ベックの欠場があった。

昨年の全英選手権シングルスを制覇してから自信をつけ、東京大会をめざす強化合宿で最も好調といわれていた。それが突然、体調をくずし、第一戦のタイ戦に続き欠場。戦力の低下に加えて、インドネシアのすさまじい体当たり作戦をくらって敗退したといってもいい。

アにつけ込まれてしまった。

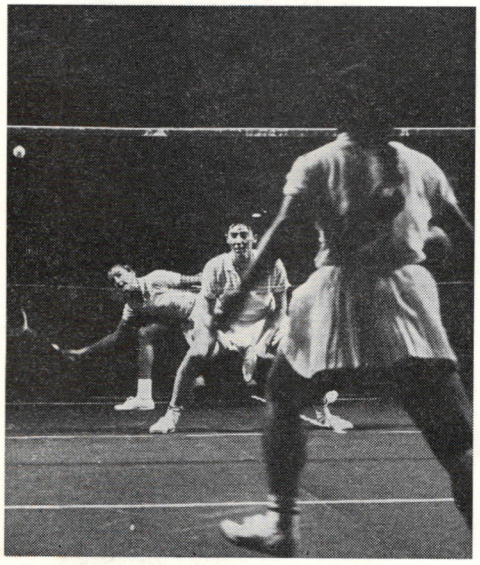
インドネシアの勝利が決まった瞬間わたしは「これで日本の初防衛は決まった」と思った。インドネシアの選手は背が低く日本と同じ型のプレーヤー揃いであり、過去、日本チームはインドネシアに負けたことがなかったからだ。

監督の今井さんも「インドネシアならこわくありません」とホッとした表情だった。だが、日本チームの将来のためには、相手がイギリスの方がよかったのではないだろうか。そうなれば長身の欧米選手のプレーに馴れることも出来たし、最終日に相沢、竹中の若手長身ペアを使って次期防衛戦に備えることも考えられたからである。

コーナーをつくスマッシュがますますさえる。13－10からうばった2ポイントはあざやかなスマッシュでとどめをさした。

タイ戦で無敗のペリンに反撃のスキを与えず襲いかかる速攻第2ゲーム後半になると英国ペアは全く闘志を失い、コーナーへ走って相手のスマッシュを拾う元気もなかった。

第2ダブルスで敗れた後、連続出場とあって体力の衰えが目立ち、観戦中の今井日本チーム監督は「今大会をめざし来日前に一カ月半南ア連邦へ遠征し強



インドネシア戦が行なわれた大会最終日、会場の東京体育館には、昼前から二百人ほどのファンが並んだ。あとも続々とつめかけ、試合開始の午後四時になると立ち見席もいっぱい。一万余の観衆でふくれ上がった。

それでも取り残されたファンが約二百人。入り口で係員と、「入れろ」「入れない」で大もめ。それにつけこんでダフ屋まで現われ、警備を原宿警察署に依頼するしまつ。

この大入りには協会の役員もびっくりして「ふだんの試合でこれだけ集まってくれれば文句ないのですがネ…」。

体育館側でも「正真正銘の札止め満員は開設いらい初めて」といっていた。

この日の入りで自信をもった協会関係者は「文部省から要請されている小、中、高校の正課採用の指導要項を早くまとめて提出します」と〃底辺拡大〃の抱負を話していた。

（サンケイ新聞）

ヘヤピン

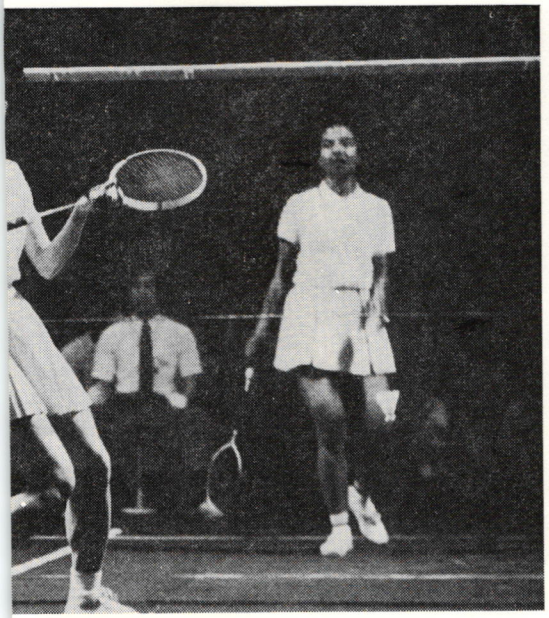
史上初の大入りに　ダフ屋もにこにこ

守る ユーバー杯 再び高木の胸に

バドミントン史上最高の一万人という大観衆でぎっしりうずまったスタンド。その拍手と興奮のあらしのなかで、輝くユーバー杯はふたたび日本チーム、高木主将の胸にしっかりと抱かれた。一年二カ月に及ぶ選手団の合宿、特訓、海外遠征…その努力がみごとに花開いたのだ。監督の目にも、選手たちの目にも、みな、感激の涙がにじんでいた。

インドネシアとの王座争いは、最初のシングルスで、湯木がミナルニに苦杯を喫したため、前途に不安をいだかせただが、沈みかけたムードを主将高木の落ち着いたプレーが救った。

二連勝――だが、三度目の栄冠めざすたたかいは、もう始まっているのだ。



日　本　6（単2―1 複4―0）1　インドネシア

（6月14日4時、東京体育館、室温30度、湿度45％、観衆10000）

▽シングルス

湯木　博江　0（6―1 2―11）2　ミナルニ○

○高木　紀子　2（11 11―0 11―0）0　ポピー

○高橋とも子　2（11 11―8 13）0　ウタミ

▽ダブルス

○高木　紀子
　湯木　博江　2（15 15―8 15―12）1　ミナルニ
　レトノ

○天野　博江
　高橋とも子　2（15―4 15―5）0　ヘスティ
　ヌルハエナ

○高木　紀子
　湯木　博江　2（15―3 15―3）0　ヘスティ
　ヌルハエナ

天野　博江
○高橋とも子　2（15―8 15―8）0　ミナルニ
　レトノ

評　時事通信　沼館義明

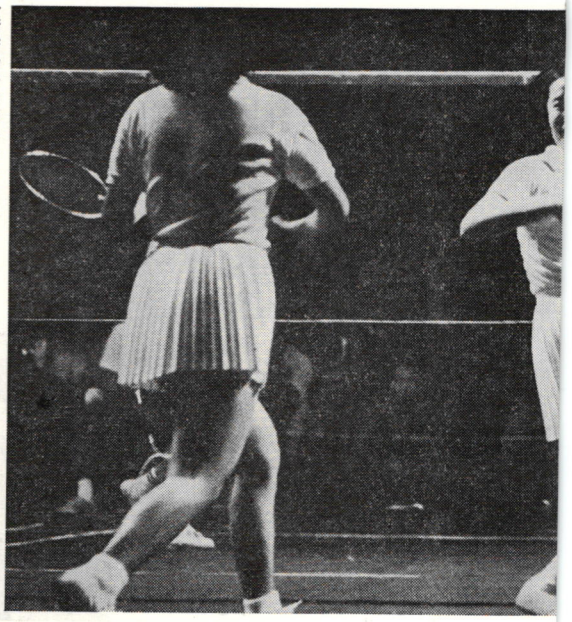
日本はエース高木を中心に力の接近した選手が、ガッチリとチームワークを組み、インドネシアの挑戦を退けた。スコアこそ6―1と開いたが、内容的には接戦、スリリングな場面が随所にある、チャレンジ・ラウンドにふさわしい好試合だった。

事実上勝負を決めたのは、第1ダブルスだった。シングルスで2―1と優位に立った日本は高木、湯木、インドネシアはミナルニ、レトノと、ナンバーワン同志の対戦。第1ゲーム、日本は湯木がシングルス完敗のショックから立ち直れず、凡ミスを連発、そこを巧みに突かれて8―15で失った。しかし第2ゲームはペースをとりもどし、不調のレトノに球を集めて15―5でタイに持ち込んだ。

第3ゲーム、湯木にようやく当たりが出始め、高木が冷静、巧妙に球をつなぎ、湯木が強打で決めるという理想的なかたちで、日本は簡単に12―5とリードした。だが、インドネシアも驚異的な粘りを発揮してじりじり追いあげ13―12と1点差まで迫った。ここでスリル満点のラリーが続いたが、日本は必死の気力をみせ、強引とも思われる

—最終日—

日本、女王の座



日本対インドネシアのインターゾーン決勝は、ともに死力をつくした激戦。それだけに迫力に満ちあふれたドラマだった。その構成はこうだ。

第一幕は落胆、第二幕は希望の訪れであり、あるていどの成功を裏づける場面。第三幕で二幕目を一歩近づけた。

そして終局に近づくに従い〝やれる〟という気概が濃くなり日本バドミントン界史上で忘れられない、ダブルスの第二試合↓選手権保持決定↓へとつながったわけだ。

第一幕は——。戦前の予想から紹介しよう。実力は五分と五分。湯木は最近台頭した若手、こわいもの知らず、全英選手権シングルス優勝。その看板を背に力で押すタイプ。対戦者のミナルニはドロップ、スマッシュに絶妙のうま味をみせ、世界のトップ・プレイヤーの座を築いた〝くせもの〟でありベテランだが、湯木が〝ドジ〟を踏まないかぎり、まずスタートからリードし逃げ切ると考えられた。

スマッシュの連打で辛くも逃げ切った。

前半のシングルスは〝大試合になればなるほど経験がモノをいう〟という事実をまのあたりにみせつけた。トップの湯木はことし全英選手権で優勝、力は高木をしのぐとさえいわれている。だが若い。極度の緊張からか、まったく足が動かず、ベテランのミナルニに軽くあしらわれてしまった。

この劣勢を一気にハネ返したのが、エース高木だった。老練高木は若いポピーを相手に落ちの経験を実際にプレーで発揮した。ユ杯史上なかったラブ・ゲーム。日本チームは自信を回復し、一気にたたみかける機会を持ち、高橋の決勝へ。防衛の気運はいやが上にもあがった。

問題は第一ダブルス。幸か不幸か相手ペアは体調不十分。日本も湯木がシングルスの不振を脱し切れなかった。だが高木が巧みにカバーして、湯木の強打を引き出した。シングルスでもそうだが、ここで感じたのは高木のうまさ、心理的なヨミの深さだ。それは残念だが文字では着いたプレーで第1ゲーム1本第2ゲーム2本のサービスを許しただけで、パーフェクト・ゲームをやってのけた。所要時間十分たらずのこの勝利は日本チームの精神的圧迫感を一掃、逆に優位に立たせた感すらある。初防衛への道はこのとき開けたといっても過言であるまい。

そして、このあとをうけた絶好調高橋が、ラインぎりぎりのエースでウタミにストレート勝ちして勝利への確かな足場を築いた。日本にとってこのシングルス2ポイントは大きかった。いい現わせないくらい。もうこの時点で3—1。防衛は決まったようなもの。

続くインドネシアの食い下がりを振り切った天野・高橋組のうまいラケットさばき、どのゲームも二度とお目にかかれないような緊張と華麗なプレーの連続だった。

ぼくはこの試合を観戦して、バドミントンをあらためて見なおした。今までの安直なイメージをみごとに打ち破られた。それは一万余の観戦者も同じことだろう。

今後、協会役員、選手は勝利におごらず、地道に努力を積み日本女子スポーツで最後の世界チャンピオンの座を立派に守り切ってもらいたいと思う。

観戦記

共同通信　竹市行男

だが結果は…。湯木にはかわいそうだが完敗。それも凡ミスで。このショックは大きかった。今井監督は「防衛は不可能」とまでもらした。それをやわらげたのがベテラン高木の第二幕。

さすがは第一人者、これまで

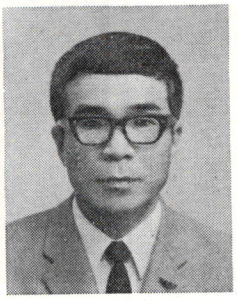
栄冠のかげに われら、かくたたかえり

特集2



総力の〝和〟が最大の勝因

コーチ　毛利清志



前大会の経験者である高木、天野、後藤、高橋を中心にメンバーを組み、これに若手を配した布陣は、当時、理事長だった森友副会長や今井監督、それに常務理事の皆さんの意見が一致したからだった。

若手を加えたのは次の第六回大会を考慮してのことである。

幸い防衛に成功したが、このチーム作りが勝利の原動力と考えている。

勝因の第二は、実にいい時期（三月）に海外遠征ができ、全英では各国の情勢を探求したし世界一といわれる英国ダブルスと対戦、また、インドネシア勢とも対決し、各人がそれぞれになにかを持ち帰って、実戦に役立ててくれたことがあげられよう。

オーダーからみて私は7―0も、じゅうぶんあり得ると思っていたし、不覚をとるとは夢にも考えなかった。しかしフタをあけるとインドネシアはミナルニを№・2に落したため、若い湯木がアガってしまい思うようなプレーができなかったことは結果論としても残念。高木にとっては相手不足だった。

しかし次の世代を背負う若手にとっては貴重な体験となったと思う。今度はこれらの選手たちが頑張る番だ。いずれにしても協会はじめ、各層の暖いご理解と大きな支援が私たちにはどんなに心強かったことか。心からお礼を申上げるしだいです。

〝人生〟も学んだこの一年

後藤和子

六月十四日――すべての焦点を、この日に合わせて、まっしぐらに進んできた一年間でした。

その焦点が、ときどきボケかけたこともありましたが、とに

ユ杯日誌

【第一次合宿】（昭和43年4月29～5・5）
東京・OMYC研修館

◆4月29日
全員遅延せず集合。ユ杯防衛めざし、エンジン始動。
森友理事長より訓話。監督、コーチよりそれぞれ抱負。

◆5月1日
朝食後、明治神宮へ散歩。10時すぎから研修館周辺はメーデーコースのため、騒然となる。夕方前回ユ杯チームの小宮監督、福井コーチ一諸に来訪、激励さる。

◆5月5日
合宿最終回。練習別、準備をしながら自然に大合唱となり民謡までとび出す。

【第二次合宿】（7・10～19）
山形体育館

◆7月12日
組み合わせ縄とびの中で、後3回し二重とびに前回と比して、長足の進歩のあとが見られる。

◆7月17日
県体育館使用不可の為、山形大で練習。本日より相沢、竹中、池田の3名西日本大会へ

◆7月18日
夜ト杯フィルム映写研究す。
午後、練習終了後、荷物まとめ。夕食後、納会を兼ねて、

第三次防衛はもう始まった

日本協会理事長　川端昇市

さる一月の全国総会で新しく理事長に選ばれた私としては、協会の業務にたずさわるひまもなく、いきなりユ杯の準備に忙殺されるという生活が幾日も続きました。

さいわい諸先輩はじめ関係者のご指導とご協力を得まして、大会は成功裡に終始しましたが終了したいま、あらためて協会の今後を考え、その職責の重大さを痛感しています。

特にユーバー杯は日本のスポーツ界にあって女子種目の団体の世界チャンピオンとしては唯一のものだけに、この名誉と栄光は、ただバドミントンのみならず、日本全体のスポーツ愛好者の宝物として維持、防衛する義務があるかと思います。

次の大会まであと三年あります。しかし次の大会はもうはじまっているのです。世界のレベルもぐんと上昇するであろうことを考える時、われわれはここではっきりした選手強化方針を打ち出す必要があると確信します。

私もこれまで幾度か世界大会の監督をつとめさせていただいたのですが、経験だけに頼ることは危険であり、むしろ大きな大会の未経験者であっても、日夜、技術の向上のために努力しておられる各層の方々の意見もあわせて今後の方針を決めるべきではないかと考えています。

日夜、勤勉に研究されている指導者の方々がより集って指導理念を確立、選手層の拡大と技術の向上を目指すことが最善の方法ではないでしょうか。

さる七月の理事会で「競技力向上委員会」の設置が審議されましたが、しっかりした指導理念を持つ人々が中軸になって真剣に検討すべきだと思います。

今井監督が大会終了後、体を休めるひまもなく学校にもどり練習に打ち込んでおられたのを見て、私はユ杯が確実に防衛できた真因を知ることができたのでした。

□　□　□

かく〝防衛〟めざして私なりに精いっぱいやったつもりです。

いま、すべてが終わって思うこと、それは

「人それぞれの立ち場を理解し、心の中を理解し合うことのなんとむずかしいことか。

与えられた立ち場に応じて使命を全うしなければならないとはわかっていても、自分自身をその通りに動かすことの、なんとせつなく苦しいものか。

そして、その心の〝試練〟を乗り越え、助け合い、はげまし合うことのすばらしさ。

試合そのものには直接、関係なかったことながら〝人生のなにか〟を学んだ、貴重なこの一年でした。

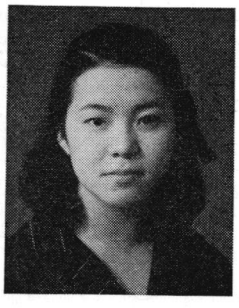
しかし、二度とはくり返したくないこの体験から、私が得ものは、失なったもの以上に大きかったと思います。

たたかいのあとに、かならずおそわれる空しさのなかで、静かにふりかえってみては、自問自答している、きのう、きょうです。

それも、勝負の世界におけるバドミントンの魅力のとりこになったまま……。若い人相手にまた、練習をはじめました。

〝打倒高木〟が自信に

高橋とも子



ニュージーランドのウェリントンで米国を破ったことがついた昨日のように思えます。最年少だった私は優勝の感激もつかの間、この勝利は次回、日本での防衛戦の出発点だ、と思いながら帰国しました。

この年の十二月タイのバンコクでアジア大会が行なわれました。私の三度目の海外遠征は暑さと食事に悩まされましたが、一つ一つが勉強になりました。

このころ「ユーバー杯防衛には高木さんに勝てる選手が二人いければ」と感じていました。それからは私の目標だった〝打倒高木〟がユ杯の勝利へも通じると信じ、練習に励みましたが大学四年に後輩の湯木選手に負け、全日本総合では高校生の相

市内ビル屋上のビヤガーデンへ。大いにさわぐ。

【第三次合宿】（12・28～1・5）長崎・松山国際体育館

◆12月27日
皆悪戦苦闘の末、長崎入り。帰りが今から思いやられる。

◆12月29日
天野選手、手首調子悪く休ませる。体育館の外は師走の風であるが、館内は熱気にあふれている。

◆12月31日
夕食後、前夜抽選を行なった順で指定席にすわり、紅白歌合戦をみる。旅館の御厚志で年越しそばをいただく。

◆1月1日
朝食後諏訪神社へ参拝。小雪ちらつき始める。その足で会長宅に年賀あいさつ。おせち料理をいただく。午後初打ち普通のように練習。

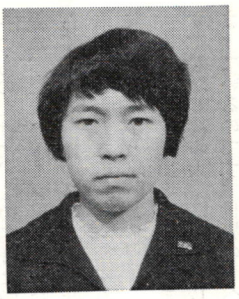
【第四次合宿】（4・28～5・5）東京・北辰電機

◆4月29日
午後、相場常務理事陣中見舞。昼食、夕食ともトンカツの為シマッタと思ったが、さにあらず、それぞれに趣があって良かった。

◆5月4日
チームを二つにわけ、仮想チャレンジ・ラウンド。最終日まで、これをくり返す。秋元

苦杯をプラスに転じたい

湯木博江



昨年、高木選手を破ったことも、大きな心の支えになりました。また全英選手権大会への参加で貴重な体験を得ることができました。

私に関する限り、これらの合宿、試合、海外遠征などの体験がすべて、最終目的のユ杯戦で精いっぱい戦えた〝栄養〟として役立ったと思います。

それにしても、戦いは実に長かった。これが実感です。

勝利の感激にひたりきる間もなく、米国との親善試合で福岡へ。帰京して、関係方面へのあいさつまわり。これでユ杯はすべて終わった。

同時に「いまから、三度目の防衛戦が始まった」ことを強く感じずにはいられなかった。

昭和四十四年六月十四日、午後四時からの数時間。これが私のゴールだった。

〝候補選手〟から〝正選手〟へ。「ユ杯に出るんだ」という実感がわいて来たのは、今年一月の合宿ごろだった。

数次の合宿、そして本番までの二回の海外遠征。この遠征こそ私の支えのすべてだったと思う。

インターゾーンが始まり、新聞をはじめ、すべての報道機関は日本の勝利をさかんに予想↖

――ズバリ、勝因を……。

と聞かれて高木さんははっきりといった。

「チームワークの勝利」。

かんじんの結婚の話にふれてみた。

記者団との応答と同じ言葉が返ってきた。残念ながら期待？に反したが、バドミントンのためには大いにプラスだ。

「バドミントンやめろというやつのところなんか行くなよ」と、また弥次馬がたたみかけたが、この二十六歳のベテランは、まるで少女のようにはにかみ、顔を赤らめた。ただ無言で苦笑していた。

学（日女体大）の練習にも参加させてもらい、この上なく恵まれた環境で私は育てられたと思います。

沢選手に不覚をとるなど自信を失った時期もありました。

卒業して北辰電気へ。週三回の会社での練習と、ときには大

スポット

高木紀子



初防衛が成功したあとの記者団とのインタビューで、高木さんは「次の防衛は若い人たちで……」と不用意？に洩らした。

「すわ、結婚？」と記者諸氏が感じたのを、あながちゲスのカンぐりとはいえまい。

「そりゃ、私だって女性ですから……」独特の語感。語尾がややあがる。

「外国へ行くようになってからかな。それとも学校の先生になってからかな」というのが、周囲の見解。ご本人は〝岐阜弁〟と釈明した。

「郷に入れば郷に従え」ということか。

高木さんの通称は〝先生〟である。本職が先生だから、ニックネームとはいえないがまさにピッタリの表現。

スポーツ選手とは思えぬほど小柄だが、コートに立つとやはり大きく見えるから不思議。

「三年間、この日を目ざして練習しました。しかしコートに立つとそれがもうひどく短かくて。十年間ラケットを握って果して明日、その苦労が結べるかどうかと不安でした」

いくら世界一のベテランとはいえ、心中おだやかではなかったろう。

氏学連中田、本島、新沢三委員陣中見舞。

◆5月5日

全ての強化合宿終了。あとは各自うまく調整し、本番に備えるよう監督より注意あり。

【最終調整合宿】（6・5～13）東京・観月旅館

◆6月5日

いよ〳〵本番目ざし調整。生活を午後5時～9時位に身体の調子がベストになるように時間割りを組む。従って朝食は10時近くにとり、全体をずらしていく。

別記（19ページ）の如く、ユニフォーム補正が間にあわず、身体をあわせにかかる。

16時日産自動車ご厚意のマイクロバス到着、椿山荘でのレセプションに参加。21時帰宿入浴後ミーティング。

◆6月9日

8時45分、本田会長、川端理事長と共に選手団一同で明治神宮に参拝。必勝を祈願。

13～15時北辰体育館で練習。

15時30分の昼食時、NHKTV、スポーツアワーの取材でフィルム撮影。16時30分、宿舎発、小一時間、アメリカ・インドネシア戦を観戦。20時30分帰宿後ミーティング。

◆6月10日

スポット

天野博江

決勝戦の前日、選手たちは明治神宮に参拝した。ところが天野さんは静岡の実家に帰ってさらに氏神の小国神社で必祈願をしている。念がいっている。

「縁起をかつぐタチなんです。信心深いわけじゃないけど、雑念が取り払われてすっきり。無我の境にひたるって感じ」

この人、明朗快活。まったくよく笑う。お月さんのように愛くるしいまるい顔。

まるまるとよくふとっている。それでも53キロしか？ないそうだ。

「この日のために——調整したんです。ずっと体を悪くしていて……」

前回、高木と一緒にニュージランドへ行き、ユーバー杯を持ち帰ったが、このときはスタミナを考え軽くするように努力したそうだ。

「こんどは力をつけるためにエネルギーとスタミナづくりをやりました。趣味（食べること）と実益を兼ねて……」

ウッ、フッ、フッ……」

食べることに専念したといい「自分でもおかしい」そうである。

守護神がついていたおかげか、試合はまったく冷静に見えた。「〝勝ち〟を意識せず一心にシャトルを追うことができたのはひさしぶり」

この人、勝敗を、または勝負をといわず〝勝ち〟をといきるところが憎い。試合前から勝っていたわけだ。

「高橋さんが最高のコンディションですばらしいプレーをしてくれましたから……。呼吸はピッタリ、歯車の回転は上々……」

淀みなくスラスラと、同僚を礼讃。そして敵をたたえることも忘れない。

「ミナルニの女豹のようなプレーはまったく素晴らしいさすがはバドントミンの女王ですね」





うれしかった〝助言〟

相沢マチ子

肥えた目をもつというのは、素晴らしいことである。ユーバー杯初防衛のあとで、札幌へ転戦した私たちは、インドネシア・チームの監督から、そのとき「日本のプレーヤーのストロークはインドネシアのそれにくらべて甘いのでは」という評を戴いたのである。この忠告を、どんなに嬉しく聞いたかもしれない。ともすると参加したという意義以外に、たくさんのものを長い時間をかけて失なおうとしていたときだけに、ワラをもつかむ気持で練習に努力した。

しかし、あの大観衆の前で、しかも地元・日本でやった、この大きな経験は、どうしても活かしていかなければならない。

いま、あのなさけなかった試合の結果をどうプラスに転じるか考え続けている。考えるのはやすく、行なうはむずかしい。

決勝戦の前日、選手たちは明治神宮に参拝した。ところが天野さんは静岡の実家に帰ってさらに氏神の小国神社で必祈願をしている。念がいっている。

「縁起をかつぐタチなんです。信心深いわけじゃないけど、雑念が取り払われてすっきり。無我の境にひたるって感じ」

この人、明朗快活。まったくよく笑う。お月さんのように愛くるしいまるい顔。

まるまるとよくふとっている。それでも53キロしか？ないそうだ。

「この日のために——調整したんです。ずっと体を悪くしていて……」

前回、高木と一緒にニュージランドへ行き、ユーバー杯を持ち帰ったが、このときはスタミナを考え軽くするように努力したそうだ。

「こんどは力をつけるためにエネルギーとスタミナづくりをやりました。趣味（食べること）と実益を兼ねて……」

ウッ、フッ、フッ……」

食べることに専念したといい「自分でもおかしい」そうである。

守護神がついていたおかげか、試合はまったく冷静に見えた。「〝勝ち〟を意識せず一心にシャトルを追うことができたのはひさしぶり」

この人、勝敗を、または勝負をといわず〝勝ち〟をといきるところが憎い。試合前から勝っていたわけだ。

「高橋さんが最高のコンディションですばらしいプレーをしてくれましたから……。呼吸はピッタリ、歯車の回転は上々……」

淀みなくスラスラと、同僚を礼讃。そして敵をたたえることも忘れない。

「ミナルニの女豹のようなプレーはまったく素晴らしいさすがはバドントミンの女王ですね」

うれしかった〝助言〟

相沢マチ子

肥えた目をもつというのは、素晴らしいことである。ユーバー杯初防衛のあとで、札幌へ転戦した私たちは、インドネシア・チームの監督から、そのとき「日本のプレーヤーのストロークはインドネシアのそれにくらべて甘いのでは」という評を戴いたのである。この忠告を、どんなに嬉しく聞いたかもしれない。ともすると参加したという意義以外に、たくさんのものを長い時間をかけて失なおうとしていたときだけに、ワラをも

しかし、あの大観衆の前で、しかも地元・日本でやった、この大きな経験は、どうしても活かしていかなければならない。

いま、あのなさけなかった試合の結果をどうプラスに転じるか考え続けている。考えるのはやすく、行なうはむずかしい。

ルスの借りを返したい」気持が強く働いていた。防衛が決まった瞬間は涙しかわいてこなかった。半分にがい涙だった。

決勝戦の前日、選手たちは明治神宮に参拝した。ところが天野さんは静岡の実家に帰ってさらに氏神の小国神社で必祈願をしている。念がいっている。

「縁起をかつぐタチなんです。信心深いわけじゃないけど、雑念が取り払われてすっきり。無我の境にひたるって感じ」

この人、明朗快活。まったくよく笑う。お月さんのように愛くるしいまるい顔。

まるまるとよくふとっている。それでも53キロしか？ないそうだ。

「この日のために——調整

↘した。「試合はやってみなければわからない」はずだが、しかし、この報道のおかげで私たちは『負ける気がしない』で本番にのぞめたのかもしれない。

四十八時間前にオーダー発表対戦国はインドネシア。私はミナルニと当たった。ミナルニとの顔合わせは、それほど考えていなかった。

だから聞いた一瞬、いろんな思いが頭の中をかけまわった。このとき、すでに負けていた、といえるだろう。

それ以後、平静さを保てないままでの対戦。結果はみじめだった。悲しいというより、自分がなさけなく歯がゆかった。

なんとか調子が出てきたのはダブルスの後半から。「シング

15時宿舎発、会場で練習。インターゾーン決勝オーダーを入手。夕食、ミーティング後役員3名で明日提出のメンバーについて最終検討。二案を作成し明日の勝者を見て最終的に決定するよう打合わせる。

◆6月11日
11時40分宿舎発インターゾーン決勝観戦。インドネシアに決定後、本番のメンバー及び国際親善試合の予定発表。目標に狙い定まる！

◆6月12日
16時一寸すぎ、オーダー交換を終えて宿舎に帰った高木主将を、皆がとりかこむ。高木少々もったいぶって順番に発表。ウタミのトップは一寸意表をつかれた感じ。すべてがすっきりして16時30分バスは東京体育館へ。

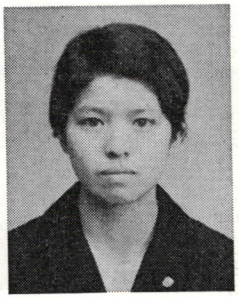
◆6月13日
いよ〳〵明日に〝本番〟を控えるも、全員快調。湯木選手は、ミナルニとあって、若干緊張気味。16時～18時迄、会場で最後の練習。思い残すこと何もなし。帰宿後は、のんびりとミーティング。

◆6月14日
防衛！
宿舎で祝勝会。皆んな大いにさわぐ。皆さん、本当にありがとうございました!!

⬅つかみたい気持ちだった私たちに、このひとことは、得がたい、いましめのことばになったのである。

「美しい動き」とは「からだの中心部位の動作が、しだいに末梢部位に伝わる」ようなことをいうのだと、私たちの大学の監督に教えられていたことを、思いだしたからである。

いわゆる、「ムチのような動き」をバドミントンに生かそうとする、数々の典型をインドネシアのプレー中に見せてもらったのである。未熟ながら敢闘したウタミのプレーを頭に焼きつけて、せめても「収獲」と呼べるものを残したいと思ったのである。



〝夢〟を三年後に

本間恵美子



ラケットを握って九年目、やっと世界の桧舞台の選手になれた。しかし春になって、からだをこわしてしまった。神が自分を見捨てたのか、自分が不注意だったためか。

でも最後の東京合宿、大会前の会場練習では出場選手を相手に精一杯プレーすることができた。

このことは自分にとっても大変な収穫であり、また他の選手にとってもわずかながら心の支えになってもらえたのではないかと思う。

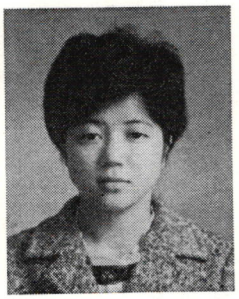
勝利の瞬間には、うれしさが十二人の頭に舞い降りてきた感じだった。試合に出れなかった自分だったが……。

大会後福岡での親善試合に参加させていただいた。試合ができないと思っていた自分でありアメリカチームとの試合は終生忘れられない想い出となるでしょう。

ともあれ、現在は三年後のことが頭の中に浸透し始めています。

ベンチではらはら

浦口恵子



大学入学間もなくユ杯の候補選手に選ばれた。まだ無我夢中でプレーをしている頃だった。そのうえコーチが高校時代の恩師毛利先生であり、当初から練習、合宿等にすぐなれることができ大変恵まれていたように思う。

しかも高木先輩はじめ諸先輩と寝食を共にしプレー、その他生活面で多くのものを学び得ることができた。

しかしながら、尊敬する近藤先輩がメンバーから抜けていったときの悲しさ、あの悲しさは今でも忘れられない。二度と味わいたくない気持だ。

チャレンジラウンドが始まり中学以来のコンビ湯木選手がミナルニ選手に負けてしまった。あのときには、日本チームはどうなるのかと思った。頭の中に人の声がした。新聞の予想記事も浮んだ。

『日本ユ杯防衛か!!』『防衛確実、ユーバー杯』他……。

私も心の中で焦った。しかしその後高木先輩がポピー選手に一点も許さずに勝ったとき、自分の心に〝やはり実力は日本の方が上〟という感じが湧いてきた。

タブルスが始まった。湯木選手がだんだん本来の姿に戻り、バックスマッシュなどが鋭く決ったときは自分のことのようにうれしかった。

ユ杯は自分にとり貴重な体験であった。とともに、自分が大きな口をあけてバナナを食べているのをテレビで観て大笑いしたという、楽しい想いも織り込まれています。

生かしたい貴重な体験

竹中悦子



ジョーンズ（米国）の前衛でのさばき。相手の返球を鋭くよみ、打つ前に対策が頭の中にできている。ムダが少しもない。

ミナルニを中心とするインドネシア。勝負への気構えが英米と対照的。陰気な悲壮感……。

日本と似たプレーながら肩、腰を力の焦点ではなく、バランスの中心にしている。だから同じフォームから多彩なストロークが打てる……。

得たものの中から、自分に利用でき、役立つものを自分のからだに覚え込ませたい。〝今後〟は自分の〝自覚と努力〟にあるんだ、といい聞かせた。

外人選手の印象寸描。ベンチから見たまま——。

英国のダブルス。ウェトナールの前衛での流れるようなプレー。それを生かすボグゾールの後衛からの確実なプレー。相手に迷いを起こさせるにじゅうぶん。二人の連係には寸分のスキもない、といえるほど。

カエルの一年

日本チーム・マネジャー
山本洋彦



▼カエルの由来

まず最初に、タイトルにある「カエル」について、ちょっとふれておく。私が高校二年の夏神奈川の国体チームの一員に選ばれ厚木の厚木東高で強化合宿を行なったときのこと。当時の厚木は、まだ各所に広々とした田畑があり、その関係で必然的に無数のカエル諸氏がいた。

ある日、練習を終わって引あげてくると、合宿所の入口の所であわれにも水分欠乏症にかかり、昇天されたカエル君を見つけた。私はそこで彼をつまみあげ、よく皆さんがやるように女子選手をからかったところ、杉田夫人に見つかり、そのとき以来〝カエル〟というペットネームを頂だいしているというわけである。

私としても、私の外見その他から推して、この命名に対しては特に異議のないところであるし、なるほどとうなずかれる方々も少なくないと思う。

▼食事のこと

食事とまではいかないが、いろいろなものによく添えられるパセリとサクランボの話。おもに副食に色どりをそえる役目と解釈されている。これら二つのものも、天野、竹中両選手にあうと立派なおかずの役目を果たす。天野→パセリ、竹中→サクランボの関係があり、これらが出されると二人は虎視たんたんと、他人のお皿の上にえものを追い求め、最後にはほぼ完全に自分のお皿への回収に成功する。ついには合宿を重ねるにしたがって、だまっていても、これらは二人のもとに集合するという慣習が成立したことをつけ加えておく。

▼ユニフォームのこと

はなやかな開会式のときに選手団の着用したユニフォームにも、エピソードがある。まず選手の皆さんに申しわけありませんでしたと前置きして、この話を進めていきたい。わけはあとでわかります。

ユニフォームの色、布地その他、詳細が決定したのは、五月の東京・北辰合宿でのこと。この件でのミーティングは議論百出し、とどまるところを知らず今井監督がゴロリと横になってしまうほどであった。

女の子ってこんなに気にするのかと、あらためて認識させられたものである。なん人かの人に聞かれたもので、ここで言明しておくが、寸法をとるという役は、マネジャーの役目の中には含まれませんでした！

さて詳細決定し、発註したあと、本来ならば仮縫いするのが常道なのであるが、五月の合宿のあとふたたびチームが集合したのが六月五日。その間、東京にいた者はなんとか補正を行なったが、他の者はその余裕もなく、出来あがったものに自分のからだの方を合わせるというハメとなった。

開会式でのユニフォームの評判は比較的良かったと思われるが〝ミジカミのなんとか〟になってみたり、スカートのベルト部分を折り返して、長すぎる丈をごまかしてみたり、いろいろやりくりをした。なお寸法をとった時点で「ユ杯本番のときには自分はこのくらいになるだろう」と予想、若干、修正して寸法取りをしたのに、本番のときにその予想通りにいかなかったものもいたようだ。

▼まとめ

一年間のチームのマネージメントの中には、まだ幾多のおもしろいこと、辛いこと、悲しいことがあったが、現在はすべてが勝ったことで、楽しい思い出となった。紙面のつごうでこれ以上は書けないし、またあまり書くと告訴される（？）といけないので、このくらいでチョンにしたい。本当に皆さんありがとうございました。とくになにかありましたら、個人的にお話しいたしましょう?!

おめでとう期待します

際して

おめでとう

◆◇◆ おめでとう期待します ◇◆◇

三百万愛好者のために

日本協会理事長
川端昇市

東京体育館に集まった一万人以上の大観衆のなかで、華々しくも劇的な初防衛をなしとげた日本チームの雄姿を思い浮べるにつけ、マイナー・スポーツといわれたバドミントンの将来が、バラ色に輝やくうれしさを否定することはできない。

それは日本全国のバドミントン愛好者にどんなに力強くうつったことだろう。

バドミントンがわが国に誕生した時期は、通説まちまちで決定的なものはない。

しかし日本バドミントン協会が正式に設立した時期を出発点とみれば、ここ二十数年、いくつかの国際試合を行ない、かつまた優秀な成績をおさめながらも、なぜ一般大衆から遊離した存在であったかをあらためた再考する余地があるのではないだろうか。

スポーツの世界には数多くの種目があり、それぞれ個性も違うが、人々に与える共通な要素は人間の力の限界への挑戦といえる。

そこに美があり技があり憧れがあり、観る人を陶酔させるのではないだろうか。

バドミントンも他の競技にまさるとも劣らぬ魅力的要素がじゅうぶんにある。ただそれを一般の人々にアピールすることがこれまであまりできなかったのではないだろうか。

これはマスコミ、つまり新聞テレビを通じた報道とは、切っても切り離せないことだと考える。以前から幾度も提唱されながら実現できなかったのもたしかだが……。

こんどの大会で私は報道関係の各氏とねんごろになり、幾多の人々と人間的な心のふれ合いを得たが、これらのことが協会の広報活動に大きなプラスになったことは確かである。

バドミントンにとってこれまでになく多大の紙面を割いて下さった報道機関のご尽力に、あらためて感謝する次第なのだがそうしたなかから、こんどバドミントン記者会が誕生し、そしてこれらの方々が中心になって協会機関誌の発刊に力を添えていただくことになったのは、わがバドミントン協会としてはこの上なく力強くまた頼もしく喜こばしいことである。

この新機関誌は協会広報委員と記者諸氏が編集にたずさわるものだが、従来の協会報だったNBAにかわり、日本協会だけでなく、各都道府県協会、実業団学連、さらには教職員連盟などの幅広いバドミントンのための雑誌とすることが念願である。

またバドミントン競技に関した指導書的役割も果させるべく考慮されているが、この雑誌は日本のバドミントン選手のみならず一般愛好者も加えた本格的なバドミントン総合雑誌にするのが狙いである。

その意味で全国のバドミントン界の方との深いご理解とご協力を得たいと切望する次第である。

全組織をあげて積極的に協力

日本教職員バドミントン連盟理事長
平田登志郎

第五回ユーバー杯大会を成功裡に終らせたのを契機に、日本バドミントン協会より月刊の機関誌が発行される運びとなったの、はまったく喜ばしい。

近年わが日本バドミントン協会の発展ぶりは、他の競技団体以上のものだと自負している。

バドミントン競技はオリンピック種目にこそまだ入ってはいないが、広く全世界の国々で楽しまれていることは、多くの識者の知るところである。

しかし、他の競技同様、世界選手権大会が開催されている今日、大会で好成績をあげるべく赤心の努力をし、その実をあげている本協会は日本体育協会傘下団体の中で屈指の内にある。

日本のバドミントンは、男子は第六回トマス杯大会にインターゾーン決勝でマレーシアに敗れはしたが世界第三位にランクされ、女子は第四回、第五回と連続制覇し、その力を世界に誇示した。

男子が世界選手権保持国になるには、まだ数年を要するものと思われるが、世界の他の国々と異って、若手を組織的に育成する環境を持つ我が国は、近い将来にかならず男女制覇を実現するものと確信している。このために、日本協会全会員が心をひとつにして、目的達成に邁進しよう。

我が教職員連盟は、会員相互の親睦と指導法の研究のために数年前より機関誌「バドミントン体育」を発刊してきた。

しかし、時間的、経済的理由から、内容的にも不備な面が多々見られ、その内容の充実さが課題とされている。日本協会の機関誌は、日本バドミントン界の総決算となるべき性格のものである。

全国47都道府県と沖縄協会の活躍、実業団、学生、教職員、高体連などの状況をすみやかに全員に伝え、日本協会の動きを正確に伝達するものと思う。

また、この機関誌を通じ広く会員から、建設的な意見を聞き

おめでとう期待します

「バドミントン界」

発刊に

おめでとう

◆◇◆ おめでとう期待します ◆◇◆

時期を得た発刊

日本実業団バドミントン連盟理事長
増井益二

十九世紀の中期、インドから英国にわたり、ルール化したバドミントン競技が、いつ日本に伝来した、というよりも、戦後の発展は他のスポーツをはるかにしのいで日本の果てまで「西洋の羽根つき」として知らない人はいないのでありますが、こと ルールとか、技術とか、まで知っているのは「バドミントン・エリート」だけといえるかも知れません。

一昨年頃、ある東京の商店街で店員のレクリエーションにバドミントンをやらぜたいから指導をして欲しいと要請があったので、行ってみると共同で店員の宿舎を建て、屋上でスポーツやレクリェーションに、なにをやらせるかということになり、あぶなくない、夜もできるスポーツとして推薦されたわけですが、その推薦した役員は、戦時中、南方派遣の兵隊さんで「夜もできる」ことを知っていて、南方は無風の時があることは忘れていました。

それにやるからには試合に出したい希望、またバドミントンはインドア・スポーツであるという立場などから実現はしませんでした。

この話など、バドミントン競技の広報の難しさを物語っているのではないでしょうか。

女子世界選手権を獲得し、防衛に成功した現在、世界でも最高の地位である日本バドミントン協会が、ほんとうの意味の広報活動に乗り出すことは「時、ここに得たり」というべきでしょう。

どうかより沢山の人々に、バドミントンを知ってもらうためにも、協会の全組織をあげ、全智全能を傾けて、毎号、実のある、読まれる、月刊誌を出版されることをお願い致します。

国際学生にもご支援を

全日本学連委員長
本島義男

第五回ユーバー杯大会の最終日、つまりチャレンジ・ラウンドの日の興奮は、だれしも忘れえない感動と思います。このユーバー杯の防衛と、時期を同じくして発行されるNBAの機関誌も、われわれ学生連盟にとって喜ばしい限りです。

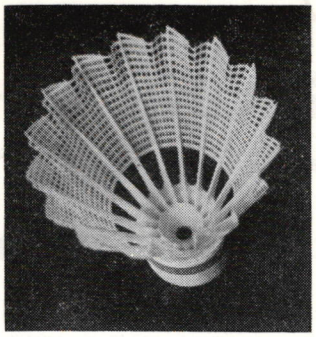
学連では数年前から「学生バドミントン」という新聞を発行してきました。ところが学連にも責任があるのですが、一部の人たちだけにしか読まれていなかったようです。今度この機関誌に学連のページももり込まれると聞いて、正直のところ、これで、よりたくさんの人たちの目に学連の活動が映ると思い、記事を書く手にも力がはいるというものです。

さて、学生連盟としては毎年八月に国際学生バドミントン選手権大会が開かれるのは、ご存知のことと思います。かって、この大会は過去四回行なわれまして、日本は第二回目より参加し、そのときは完全優勝を成し遂げています。

それに男子の場合には二回目の大会に出場してシングルスで優勝した森選手は、六七年にジャカルタで開かれた第七回トマス杯大会に出場して大活躍しました。また昨年、東京で開催された第四回国際学生選手権大会からは、今度のユーバー杯大会選手の湯木、本間、相沢、竹中の各選手を送り出しました。

ここで申し述べたいことがあります。それは国際学生選手権大会が男子の最高峰であるトマス杯、女子の最高峰であるユーバー杯につながる大会であり、日本協会としても、今後の国際学生に暖かいご支援で、若い芽を育てていただきたいということです。

終わりにこの機関誌が末ながく続きますことを念じてやみません。

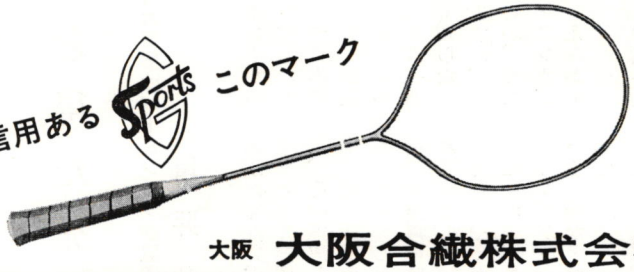


バドミントン CARLTON
普及の素
ナイロンシャトルコック

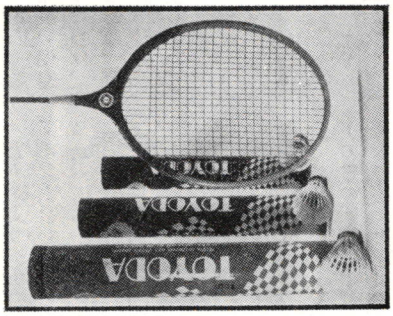
PAT 195747
PAT 233892
バトミントンシャトルコック製造販売
日本カアルトン株式会社

日本で最初のオールスチール製ラケット

信用あるSPORTS このマーク



大阪 大阪合繊株式会社 東京



TOYODA

株式会社 トヨダスポーツ
住所 東京都台東区浅草橋5－26－7
TEL (851)9409・(866)2515

Sanwa

サンワ印シャトルコック
水鳥球・陸鳥球

本年度検定合格

株式会社 三和
東京都大田区雪ヶ谷町307番地
電話 (729)8549番

ユ杯あらかると

ポスターは盗難さわぎ
―大好評の小道具―



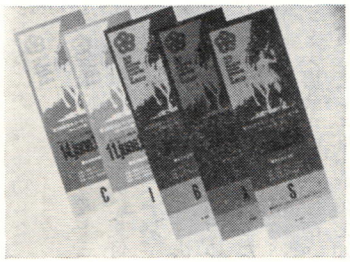
ユ杯の開催に当たり、協会では実行委と広報委が中心となり、いろいろな〝小道具〟を用意した。

まず、前宣伝に絶対に必要なポスターは新進の相沢、竹中のコンビをモデルに写真をとり、これを早川デザイン事務所の小浜正道氏がレイアウトした。

以下、この欄に登場するさまざまな小道具は、ネクタイ・ピンをのぞき、すべてプロである同氏の製作である。

さて、このポスターは四千枚を印刷、うち二千枚を高体連、学連、実業団、地方協会などを通じ、主要な各地区に配布、宣伝につとめた。また、IF加盟の外国四十七協会にも送った。

また、残り二千はプレイガイドと大会場に置き、一部二百円で販売した。デザインがざん新かつ〝モーレシ〟ぎみだったせいか、評判は上々。プレイガイドでは、知らぬ間に盗まれる騒ぎまでおき、配布の分も、自分の家へ持ち帰った、という話をかなり耳にした。

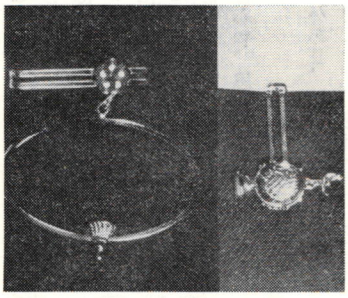


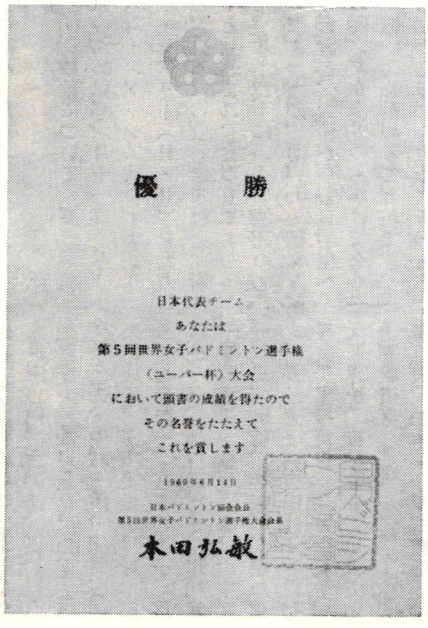
参加全選手の顔写真を入れたプログラムは、一部二百円で二千部売れ、大会役員、選手団のほか、販売用につくったバッジ（二百円）ネクタイ・ピン（五百円、五百円、三百円）も会場で即売された。

入場券はS（千円）がブルー A（五百円）グリーン、B（三百円）ピンク、C（百円）がオレンジ、招待者が黄色と、同じデザインを色ちがいにした。

売らなかったのは優勝メダルと表彰状。まあ、これは当り前の話だ。

ちなみに、これらの小道具のほとんどのなかに使われた〝五輪を重ねたマーク〟（このページのカット参照）は、大会のシンボルマークである。



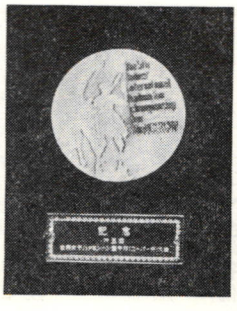


★★★

お知らせ

この欄で紹介した品物は、まだ在庫が少々あります。ご希望の方は日本協会までご連絡下されば、事情の許すかぎり、実費でおゆずりします。

★★★



ユ杯あらかると

大会の苦労と思い出

舞台裏メモ

大会委員長　森友徳兵衛

ユ杯の開催は、日本バドミントン協会にとっては〃有史以来の大事業〃だった。日本に王座防衛を果してもらうだけでなく、参加各国に喜ばれ、観客や愛好者の目、耳を通じて、競技そのものの普及発展をはかる――いろんな要素や願いが、大会にこめられていた。

結果的に大会は大成功したが、この成功を導き出したのは、運営関係の〃裏方さん〃たちの苦心と努力だった。それも、以前のトマス杯の開催を手がけたことがある、という経験が大いにモノをいったのではないか。

大会そのものは、新しい執行部が中心で行なわれたが、実際の下準備をあやまりなくやったのは、前執行部だった。紙上を借りて、これらすべての関係者に「ありがとう」を申し上げるとともに、全員を代表して、森友大会委員長に舞台裏から見た苦心や、思い出をつづってもらった。

この歴史的大会の開催に当り私は組織委の委員長と大会委員長との大任を受け、これを大過なく勤め終えたことに心から安堵と喜びを、またなにものにもかえがたい誇りを感じている。

長かった準備と気をもんだ大会を通して、私の勤めた立場からのこぼれ話を記すことが担当となった。何度も頭をぶつけながら、ともかくも無事に切ぬけいわゆる大成功のうちに幕となった。その一つ一つについてはもちろん私一人の力だけではなく、心ず一人かそれ以上の有能練達の士がサポートしてくれたのであって、むしろその人達こそ成功への立役者であったことを確認して誤解のないようにしたい。

(1) 資金について　日本体協は理事会で四十三年四月に承認されたにもかかわらず、国庫申請をおこたっていたことが十月にわかりびっくりした。また十二月追加予算組み入れ審議で、いったんゼロと査定された。都に交付金申請を四十四年一月開始、今頃ではだめといわれた。国が五百万、都が二百万と、いずれも三十九年五月ト杯東京大会と同額に決定。成功した。

(2) 会場について　四十三年十一月に申請（半年前に受付）し、十二月に割り当て会議。バスケット、バレーボールは快よく世界選手権のため期間中の使用を譲歩。一団体だけおりないのであわてた。これが都のバドミントン協会なので二度びっくり。責任者はユ杯の開催を知らなかったという。他の団体代表者の前で冷汗のかき通しであった。本当の理由は都体協から代替会場を無料で世話させたかったというだけ。

(3) 用具について　二月十五日船積注文の分がロンドンから発送されたのが四十日後の三月二十九日。五月に横浜港湾ストがあり、着いているらしいが確認できず、滞貨状態から二週間は受取れないと見て、別に航空便発送を依頼したのが二十一日手持ちは四十ダース。練習の分しかない。イギリス・チームに一ケース持参を頼んだのが頼みの綱の状況で、こんなに弱ったことはない。六月三日に中央郵便局内の税関でイヤ味を聞かされ、夕方やっと船の分九十六ダースを引き取った。この日は相当の雨だった。

(4) 観衆について　高倉氏病気のため私が六月十一日イギリス対インドネシア戦のオナレリー・レフリー（H・R）を勤めた。九日での雲行きでは必ず騒ぐと見込まれ、食事もまずかった。オーバーにいえば決死の思いであったが、さいわい妃殿下の台臨と、大使から留日学生へのパンフレットのおかげで全くぐあいよく勤めることができ、各国からほめられた。きっと各

▼ ユ杯大会役員名簿 ▲

▼総裁　秩父宮妃殿下　**▼会長**　本田弘敏　**▼会長秘書**　五十嵐正信、福田武　**▼名誉会長**　D・L・ブルーマー　**▼副会長**　新井廸之、広田兼敏、栗本義彦、松下正寿、村岡四郎、鞍勉　**▼大会委員長**　森友徳兵衛　**▼同副委員長**　川端昇市　**▼委員長席付**　村山幸雄　**▼競技委員長**　小宮淳宏　**▼同副委員長**　相場清一、伊藤基記　**▼総務部々長**　菊地利明　**▼同副部長**　上原正士、市嶋智三郎　**▼同委員**　内田正博、佐々木隆夫、浅岡武、渡辺成雄、村岡則章、増井益二、榎本彦次、牧野武、山本邦彦、玉手庸　**▼総務係**　秋本信一、本島義男、菅原元、谷浦隆、五十嵐区子、入江八重美、神部道子、中務正子、鈴木美子　**▼会場警備係**　三須徳次、組村明、土方正博、久保田忠則、大野浩、小松恒男、後藤郁夫、沖野是也、安信俊秀、久永公夫、中村一郎、桐竹賢、栗田義子、宇多美知子、野本郁子、古今紳一、宮本とよ子、落合ひろ子、池尻千恵子、市川章子　**▼選手係**　板垣隆房、山中武一、高宮利行、堺栄一、樋口信之、長沼恵子、吉田純子、能勢喜美子　**▼接待係**　今井由紀子、大塚芳子、吉田悦子、元橋美知子　**▼報道係**　秦浩、須田孝夫、大場直美、柏木葉子　**▼式典係**　堺

国とも心配していたためであろう。これで最終日の観客は平静との見通しがついた。

(5) MR・I・B・Fについて

六月十一日、彼は二つの理由で一時はカンカンに怒ってしまった。彼が私のそばに座ることを断わり、IF代表として彼が本来座るべきロイヤルボックスを指示したために、彼は終了までガンとしてイギリスのベンチのはしに座っていた。理由1はインドネシア・チームの提案を日本がいれたもののように誤解したからで、その事実はないことはすぐわかった。

開閉会式のときの彼のシートを落ちついて考えればじゅうぶん納得できる。2はIBF代表が中立として扱われなかったと解釈したことで、このことについては彼みずから責任がある。前もって自分は中立ではないからイギリス出場の試合はH・Rは辞退するといってきている。彼もし中立なりせば（本当は中立だと私は思う）私に代わってH・Rを勧めるべきであったろう。彼のような苦労人は老人性カンシャク症をおこしても、時間がたてばよく筋道が通るものである。私はその時間のため彼とその夜の食事をともにした。別れるときにはNBAの努力と誠意を心から認め、スポーツマンらしくかえって前に増して上気嫌となった。この夜の丸の内ホテル玄関前を、私は一生忘れられないだろう。

(6) その他

第八回トマス杯アジア・ゾーン決勝について、また第六回ユーバー杯最終ラウンドの開催地についてなど、MR・I・B・FはNBAにたくさんの宿題と忘れ得ぬ想い出を残して、本田会長主催サヨナラパーティの終了後、六月十五日夜ロンドンへ去って行った。

大会後の秩父宮妃殿下、また官邸での佐藤首相――。こぼれ話のしめくくりは〝勝たねばならぬ〟につきる。

▼▲　▼▲　▼▲

IF（国際連盟）加盟国一覧表

国名	クラブ	競技人口
オーストラリア	600	11300
オーストリア	49	——
ベルギー	30	700
ビルマ	173	——
カムボジア	15	107
カナダ	166	10273
セイロン	78	1400
中華民国	——	1400
チェコ	136	2627
デンマーク	495	46161
イギリス	3000	70000
フィンランド	18	2000
フランス	65	——
東ドイツ	518	13060
西ドイツ	753	19633
ホンコン	25	600
アイスランド	12	1150
インド	500	——
インドネシア	3500	60000
アイルランド	452	12000
ジャマイカ	15	——
日本	——	12000
ケニヤ	——	——
韓国	230	4600
マレイシア	——	——
マルタ	7	110
メキシコ	16	——
ネパール	——	——
オランダ	271	11611
ニュージーランド	——	12000
ノルウェー	22	——
パキスタン	250	——
ペルー	14	560
フィリッピン	70	1200
ポルトガル	8	118
スコットランド	530	12000
シンガポール	56	10500
南アフリカ	——	10135
スリナム	16	750
スウェーデン	187	8300
スス	28	572
タンガニーカ	30	15000
タトウアイリニダード	6	225
ベトナム	——	——
ウェールズ	140	3100
計48カ国	【注】——は不明	

その他 第八回トマス杯アジア・ゾーン決勝について、また第六回ユーバー杯最終ラウンドの開催地についてなど、MR・I・B・FはNBAにたくさんの宿題と忘れ得ぬ想い出を残して、本田会長主催サヨナラパーティの終了後、六月十五日夜ロンドンへ去って行った。

大会後の秩父宮妃殿下、また官邸での佐藤首相――。こぼれ話のしめくくりは〝勝たねばならぬ〟につきる。

▼▲　▼▲　▼▲

栄一、宮永武司、前田耕作、村田英夫、日本大学鶴ケ丘高等学校吹奏学部▼**救護係**　市川ひろみ、日本体育協会医事部▼**輸送宿泊係**　二方忠英、金子賢太郎▼**場内放送係**　平塚万佐子、鈴木節子▼**経理部々長**　佐藤芳朗▼**同副部長**　加藤三夫▼**収納企画係**　並木万次郎▼**支払記帳係**　今井国夫、鈴木美知子▼**競技部々長**　小飼栄一▼**同副部長**　松本弘充、伊藤鉱一▼**同委員**　高橋重夫、中島寿禧、岩井由治、石原幸雄、和田寿、神谷一三、吹田修一、布引修二増田保夫▼**進行係**　中田正彦▼**シャトル係**　村野浩、鈴木信夫宮崎重勝▼**記録係**　新沢正人▼**点数表示係**　渡辺治美、中島博子▼**名誉審判長席付**　高倉正治▼**審判部々長**　内藤安雄▼**同副部長**　岡林英男▼**主審**　福井正康、宮永武司、小島一平▼**サービスジャッジ**　森芳夫、池田信孝、拇野尾昌一、堀幸矩▼**線審**　大竹憲一、寺前信之、瀬戸孝、高橋宜、本間順次、桶谷文夫、今泉勉、岩下一雄、杉山修、秋本清、平山三城、監原敏雄、平井克英、福島由明、宮崎博、鈴木英夫、近藤繁、武岡秀之進、佐倉和明、杉本準、小山登茂子、高橋きよ子、中村ひさ子、広沢功子、佐藤伊津子、坂本順子、柿崎きち子、栗原えり子、赤塚正三

「立見席でいいからさァ…。なんとか入れてよ」
「ねえ、どうしてもダメ？」
「ほんとに申しわけありません。消防庁よりの通達ですので」
「でも、そこをなんとか…」
こんな押問答が何回となくくり返された。六月十四日、夕刻の東京体育館入口周辺でのできごとだ。
これは、決して今はやりのグループサウンズ大会ではない。
第五回世界女子バドミントン選手権大会最終日、期待の日本女子が登場するチャレン・ジラウンド、その日である。
ウワーン！とむせかえるような場内である。九基のスポットライトに浮び上ったグリーンのコート、そのそばに立ったとき、異常な興奮をハダに感じると同時に、果してこれが〝バドミントン〟の試合会場か？という錯覚をさえ起したのである。
一万有余の大観衆をのみ込んだ館内は熱気と、どよめきで渦巻き、試合開始の頃には早くも入場券の発売を中止しなければならなくなってしまった。
それでもなお入れずあきらめきれないファンが二、三百人、こんな光景を誰が予測したであろうか。
前売券の売れ行きからみて、ある程度の入りは想像していたものの、まさか木戸止めになるとは誰もが↘



マスコミパトロール

↘考えなかったに違いない。
およそ従来の〝バドミントン〟とは異質の雰囲気がそこにはあったのである。
この現実を我々は永久に記憶に留めておきたい。そして、どうしてそうなったかということも……。
だいたい、大会前に関係者の間で一番深刻に討議され問題にされたことといえば、先ず財政面が上げられるが、それと同じ位の比重で、如何にしたら観客の動員が計れるか、という問題があった。もちろんその底には、六年前、所も同じ、東京体育館で開催した第六回世界男子選手権（トマス杯）大会時にいやという程知らされた苦汁、三年前にニュージーランドで行なわれたユーバー杯大会で見事、初優勝をとげカップを持ち帰ったチャンスをも生かせなかったジレンマがあったのである。
そのような状態で迎えた今大会こそ〝バドミントンの発展と将来〟をかけた最高にして最後の機会であるといった、一種の悲壮感が関係者の中にただよっていたといっても決して過言ではなかった。
それでは、なぜそれほどまでに危惧した観客の動員が、協会の関係者においてさえ予測し得なかったほど成功したのであろうか。
答えは簡単である。マスコミの大いなる援護があったこと、この一↖

東京運動記者クラブ
バドミントン分科会

▼共同通信　竹市　行男
▼朝日新聞　瀬下　貴男
▼毎日新聞　鈴木志津子
▼読売新聞　小林　範夫
▼東京新聞　後藤　忠宏
▼日本経済新聞　森田　宏
▼サンケイ新聞　小岩　尚徳
▼報知新聞　吉広紀代子
▼日刊スポーツ　盛川　宏
▼スポーツニッポン中森　康友
▼サンケイスポーツ早乙女貞夫
▼東京中日新聞　西川順之助
▼西日本新聞　内田　敏夫
▼北海道新聞　湊　保
▼時事通信　沼館　義明
▼東京スポーツ　小泉志津男
▼デイリースポーツ勝木　弘道
▼NHK　丹下　茂佑
▼TBS　宇治　幸宏
▼NET　藤井　洵
▼NTV　酒井　武
▼フジテレビ　垣田　則三
▼東京12チャンネル若松　明

↖言につきる。

五月の末から六月の大会当日にかけての数日間、あらゆる報道機関を通じて〝バドミントン〟という文字や言葉を、一日に一度も目にしなかったり耳にしなかった人は、恐らく一人もいなかったのではないかと思う。

「イヤア、よく出てるネェ…。」

「すごいよ、今朝なんか五段抜きだぜ！」。

「俺も見た。昨日は全面を使っての特集だったよ」。

「そうそうラジオでも二、三回やっていたなア」。

こんな会話を度々聞かれたのもこの頃である。

〝マスコミの協力〟この言葉なしには、今大会は語れないのだ。

実際、こんどほど報道機関の力の偉大さ、恐ろしさを実感として感じたことはない。

今日のサッカーの隆盛や、バレーボールの発展に、多大なるマスコミの力が寄与していることは衆知の事実であるし、当協会も機会あるごとに関係方面への接近あるいは協力を依頼してきたつもりである。

しかしながら、広報活動の幼稚さ手ぬるさはまぬがれず、思うような効果はあがらなかった。

それだけに、ユーバー杯大会が東京開催に決まり、日一日と会期が↘

ユ杯成功への援護射撃



↘近づくにつれても我々の観客動員に関する自信などは、全くといっていいほど皆無に等しかった。

ちなみに今大会前後、〝バドミントン〟のためにさかれた新聞紙上のスペースや、テレビ・ラジオの放送時間を広告費に換算してみるならば約三億円に値する。

東京オリンピック当時、日紡貝塚のバレーボールチームのためにさかれた、約二十数億円という莫大な額には比すべきもないが、三億円といえば、例の〝強奪事件〟で騒がれたとき新聞紙上をにぎわせた某自動車名の広告費換算分に相当するとか。

〝マスコミの協力〟これが得られた時、その時点で今大会は90％成功したといってもよい。

大会中にも連日、四十名内外の記者の方々が取材にみえ、翌日の紙上に大々的に扱われた時、我々は、或る意味では、日本チームがカップを防衛した以上に喜んだ。

そして、東京運動記者クラブ・バドミントン分科会が発足したことでユ杯はもとより、今後のバドミントン競技の発展に大いなる希望を与えられ、協会の広報活動のあり方、またマスコミとの共存共栄がいかに大切であるかを改めて考えなおす必要があることを痛感したのだった。

協会広報委員　秦　浩

ヘヤピンショー　ユ杯こぼれ話

★弁当にはこまりました。とにかく役員全員の分を注文し、それを各個人に配るのだからひと苦労。初日などは、五十も数が足りなくなり、夜八時頃までオアズケというものまで出るしまつ。

やっとのことで売店からスシを買ってきて渡したものの、後日までそのことをいわれては、頭の上っているヒマもないというもの。

教訓「食いもののウラミはおそろしい」

★ユ杯記念品で、よく売れたもののなかにポスターがある。関係方面へ配布する〝使い走り〟を主として学連がやったが、宣伝用に町角に貼っても、もっていってしまう人が多く、こちらは、またそのあとを追いかけてくばりに走る。

おかげで大会中「学生たちはベルトがゆるんだ」とボヤくこと。余談だが、このポスター、人気のもとは絵が〝モーレツ〟だったから、とのうわさもチラホラ。

素顔のヒロイン
高木紀子のこと

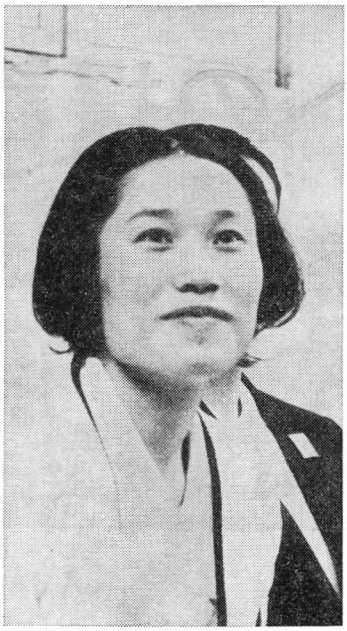
日刊スポーツ　盛川宏

大相撲夏場所の四日目、横綱の柏戸が引退した。大鵬と並び柏鵬時代を築き、斜陽スポーツの大相撲を背負って歩いた人気力士だったが、いづれ早晩〝引退〟のうわさがしきりだった。

この名古屋場所で柏戸は土俵を去ったが、こうした引退劇は力士だけに限らずスポーツマンすべてが背負っている宿命といえる。

「柏戸が引退しましたね。プロの世界のきびしさを知ると同時に寂しさを感じました」と、高木紀子は感想を洩らした。

高木が柏戸のファンであったかどうかを私は知らない。また彼女が相撲に関心を持っているかどうかも知らない。おそらくファンとしてではなく、同じスポーツの世界に生きる人間として彼女は、引退せざるを得なかった柏戸に同情し、かつまた自分の立場などに思いをはせたのだろう。



それを「なあに、女性のセンチメンタリズムさ」とかたずけることはいとやすい。高木とて人間である以上、感傷的になる日もあるだろう。これまた私の勝手な推測にすぎないが、それは皮相の見解で、高木もこうした問題に無関心ではいられなくなったということだと思う。

高木の年令ということではなく、彼女の置かれた立場が、そうしたことども考えさせるのではあるまいか。

私がはじめて高木に会ったのは三年前、彼女が同僚の天野たちとユーバー杯を日本に持ち帰ったときである。高木は若くはつらつとしており、そのわりに落ち着いたしゃべり方だったのが特に印象に残っている。

今度の防衛戦で高木と話したときも、若さにかわって貫禄というか、風格が備わっていた。日本チームの主将という大役が、はた目には全然、重そうに見えずおそらく、彼女に会った人ならいずれも「この人なら安心して観戦できる」という感じを抱いたことだろう。

私はユーバー杯大会の最中、高木の洩らしたなにげないひとことを記事にしても、後日、彼女がそのことでひどく迷惑したことを知った。私たちの感覚ではさしたることではないにしても、彼女が周囲に非常に気を配り神経を使っていることがわかって、私は恥じねばならなかった。よけいなことはいわぬが常に他人への心づかいを忘れぬ温い人柄が見えた。

ことしの高木には〝初防衛〟という大きい目標があった。それを果して、彼女はいま「これからなにをなすべきか」と考えたに違いない。いま学校で教鞭をとる彼女に、そろそろ縁談もあると聞く。「結婚して主人がやめろといえばバドミントンをやめる」と高木はいう。しかし柏戸は引退せざるを得なかったがアマチュアには引退はない。

高木は自分の技術をあとに続く世代に伝える義務もある。聡明な彼女はおそらくそれを知っているはずだ。柏戸の引退で多少、心が動いたとしても、高木はスポーツマンにとって感傷という言葉が禁句であることもまた知っているはずだと私は確信している。

ヘヤピンショー
ユ杯のミニチュアも勢ぞろい

地球儀の上に女子プレーヤーの像のユーバー杯。高木主将が開会式で返還したが、このときこのミニチュアがたくさんあるという話になった。

というのは、前回初出場で同杯をとった日本チームが佐藤首相のところにあいさつにいった。「これは返すのか。レプリカはあるのか」ときく首相に「なにもない」と答えたところ、首相が、

「それではミニチュアをつくってやろう」ということになりチーム八人、全員がつくってもらった。

さらに本田会長が、長年、協会の世話をしてきた人にも…となって、合計二十個のカップが勢ぞろい。

形が少し小さく、銀製と銀メッキの違いはあるが、本物と見違うばかりのもの。もちろん高木主将が返したのは本物だが、これは今大会で新しい保持国が決まるまで、日本協会で厳重に保管される。

（朝日新聞）

ユ杯に見た〝お国ぶり〟

★☆★☆ 東は東　西は西 ☆★☆★

報知新聞　吉広紀代子



西欧のイギリス、アメリカ、アジアからインドネシアとタイチャンピオン日本が迎えた四カ国はちょうど西欧、アジアの二カ国づつに色分けされ、アジアの一国ながら西欧化された日本をはさんで、四カ国は練習場で会場で、またパーティの席上でことあるごとに東と西の格差を見せつけた。

世界一豊かな国アメリカのバドミントンはマイナー・スポーツ。第一回から三回までユ杯保持国ということさえ疑いたくなるほど今回は精彩がなかったが競技か各選手の生活の中まで、自然に溶け込んでいる点は、豊かな社会を裏づけていた。

最年長のオルストン夫人に、宿舎でインタビューしたとき、驚かされたことがいくつかあった。

夫婦で楽しむ

写真を撮るため赤坂・日枝神社までつき合ってもらった。ところが四十段ぐらいの階段を登ると、ハアハア大息。四十歳といっても世界選手権の代表選手それなりの基礎体力はあると思っていたが、

「家の中以外ではあまり歩かない。練習はコートの中だけ」と聞いてうなずけた。

「でも二十年以上も競技を続けるにはそれなりの苦労が？」と質問すると「ヨセフ（主人）と一緒にやったから。バドミントンは私達夫婦のきずな」さらりと答えた。

そしてみずから「日本の選手もプレーヤー同士、結婚すればいつまでも続けられるわ」と強調していた。

アメリカの来日直後、女王ハッシュマンが家庭の事情で欠場と聞いて、なにか他に理由があるのではとカンぐったりしたがオルストン夫人の話を聞いていると、ハッシュマンの話も本当と思えてきた。

〝ユ杯のためだけではない〟　ニールセン選手

イギリスは伝統に支えられているが競技は社交の域を出ていないようだ。ダブルスが中心でからだに恵まれているわりには体力がない。

マッコール監督は「ユ杯のために半年近くも特別練習をやったのは初めてのこと。来日前六週間、南アへ遠征したし、今回はできるだけのことをした」という。

しかし選手たちはケロリとしている。「だって、日本のシングルスは強すぎる。私達はユ杯だけのためにバドミントンをやっているんじゃない。生活を楽しみ、充実させるため」とニールセン選手。

会場ではアメリカ・チームと同じ席で、インドネシアや日本の〝すさまじさ〟に驚き入った表情だった。

国家的背景が支え

インドネシアのユ杯体制は想像以上だった。選手は全員ジャカルタのトレーニング・センターで年中合宿同様の生活。来日前の二カ月は午前中ランニング午後練習、夜はミーティングというスケジュールできたえている。

エースのミナルニとレトノはことし、四十日間海外遠征を重ね、来日後も秘密練習に明け暮れた。ブディマン監督は「インドネシアと日本の実力差は国力の差による。もっと豊かになれば日本に勝てる」といいきっていた。

なにごとも個人とその生活を基盤に考える西欧と、国をあげて強化に取り組まなければ、まだたちうちできないアジア。

勝ち負けは別にして、私は取材中、その東西の差を強く感じた。



ミニづくめの大会
開会式は19万円

世界選手権という国際大会では、まったくめずらしい、たった〝十九分間〟の開会式。

参加国も王者に日本をふくめて五カ国なら、花束贈呈の子供たちも、立教小、立教女学院小の一年生たち。

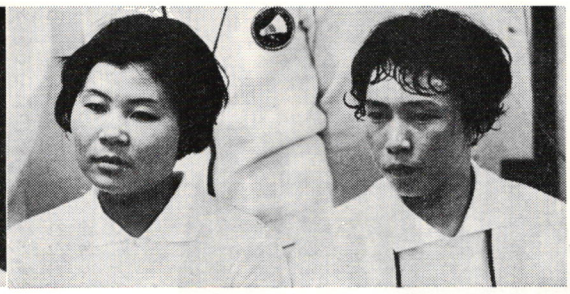
加えて、試合用のネットもこの体育館でふだん見なれたテニスやバレーボールのそれに比べて、ぐっと低い小型版。

この〝ミニ・セレモニー〟をはじめ、すべてがミニずくめのユーバー杯だが、貴賓席には秩父宮妃殿下をはじめ国際バドミントン連盟のシェラー名与主事インドネシア大使夫妻など、外国人の姿も多く、本格的な国際競技会。

しかも、日本選手はじめ各国選手の見守るなかで行なわれた英国対タイ戦は、ミニ・セレモニーからは一転してダイナミックな試合ぶり。会場全体は、さすがに世界選手権らしいムードにあふれていた。

（日刊スポーツ）





日本はなぜ強かった

すさまじいスタミナの勝利

東京新聞　後藤忠弘

「バドミントンのシングルス一試合に要するエネルギーは、野球で投手が九回を投げ抜くエネルギーに相当するという。日本は一番激しいとき、一日にこのシングルス十五試合に相当する練習をした」

日本が王座防衛に成功したとき、私は新聞紙上で、勝因を説明するのに、こんな話から、はいっていった。

「バドミントン？ああ、ハネつきか」おそらくは、このていどの認識しかない、一般読者にこの競技が「いかにきついものであるか」知ってもらうには、このような表現が、もっともわかりやすいと思ったからだ。

「ある運動が、どのくらい激しいか」を決めるのに、RMR（エネルギー代謝率）で測定する方法がある。

安静時と運動をやったときの酸素消費量の比較から、数字をひき出すのだが、この計算でいくとシングルス一試合（約20分）と投手の九回完投が、ほぼひとしいとの答えが出る。

ついでにいうと、同じ野球でも内野手のRMRは、投手の約四分の一。

江夏もびっくり？

だから、たとえば高木、天野らの一試合の〝労働〟は、王、長島（巨人）の四試合分でありユ杯代表の一日分の練習量は江夏（阪神）鈴木（近鉄）などが一カ月働く量に相当する。

王や江夏が聞いたら、腰を抜かしただろうし、このデータは私自身にも、大変なおどろきだった。

日本は、なぜ強かった——一年余にわたる〝ナショナル・チーム〟の編成。その間の五度にわたる合宿、海外遠征、チームワークなどから生まれた経験と自信…いや、その前にある、ふだんからの選手育成の努力と、よい指導者、それによる層の厚さ……。

要するに「関係者の総力の結集が栄冠をもたらした」とする考え方は、まさに事実だろう。

だが、私はこれを、日本選手がいかに激しい練習に耐え、いかにすさまじいスタミナの持ち主であったか、の一点に集約したいのだ。

体力がなければ、どんな名論も技術も実現できない。体力が続かなくては〝根性〟も〝おれについてこい〟もあり得ない。

読者のみなさんは、おそらくインドネシアと対戦した米、英チームのなかに、足をひきつらせ、夫神寸前まで追い込まれた選手がいたことを、おぼえているだろう。

もちろん、各国に〝勝てないお家の事情〟があったことを無視はできない。

欧米のバドミントンは、クラブという〝社交界〟で育った。いわば〝お遊び〟。学校を母体として、組織的に選手づくりを積み上げている日本とちがい、合宿だ、特訓だということが、ままにならない。

「愛好者を入れれば、全国民がやっている」インドネシアはまた、経済的理由から「経験を積みたくても、日本のようには海外遠征できない」（ミナルニ選手）という、別の事情をかかえている。

〝第三の魔女〟誕生

話を戻そう。最初に引用した記事のあとには「これだけの練習でベストの体重を維持するには、一日四千カロリーが必要」という一節が続いている。

この話を、ある席で日本バレーボール協会の松平強化本部長に伝えた。とたんに、彼は「エッ」と絶句した。

「日本式メニューなら、キミ男だってそんなに食べられないよ。サーロイン・ステーキ一枚でも八百カロリーだからね、かつぐなよ」

ユ杯の日本代表は、平均身長を求めれば、全チームのなかで最も小型だったろう。コートを一歩、離れると〝平均的日本人〟にしか見えない、彼女らの横顔をながめ、私は思った「こういうのが本当の〝魔女〟だ」

試合中のベンチの表情
左から湯木、高木、天野、高橋

ユ杯体調表

診言集

どなたか、お心当たりの方は、いませんか？

某月某日

「もう少し、練習したい気がする」（A）

「練習が毎日ないので体がなまっている（Y）

「試合をみて後に目が痛くてしかたがなかったが、三十分位でもとにもどった」（A）

「午後の昼食までが長く苦しかった「（T）

「別にないが、食事がおいしい」（T）

某月某日

「右足つちふまずのよこが痛い」（G）

「浅く眠りたりない」（T）

「きのうと同じ」（T）

「長崎に来るまで睡眠不足のせいか頭がボンヤリとしたりガンガンして一日中がゆううつであった」（A）

「足が重く目が重かった」（A）

「体中がいきんで疲れる」（A）

「右手ねんざ、病院へ行き注射」（Y）

「練習をやらせていただけてうれしかった。カールトンのラケットに早く慣れたい!!」（Y）

某月某日

「便秘気味」（A）

「目立ったつかれはないけど何となく動きにくい感じ」（G）

「午後から少し足がもたついた」（G）

「縄飛びが終わったら、両脚がつりました。（すぐ治りました）」（T）

「合宿三日目、朝起きると体がギシギシいっていたかった。快調!!」（Y）

「今日は休みの日。何もしないで体重が増える」（Y）

「肩と脚が重たい。特に肩。今日も大売疲れた。（ナワトビのおかげ）」（U）

某月某日

「少し疲労気味だが、どうしたことか」（A）



パワーと長身とに恵まれた

次代のホープたち

東京中日新聞　西川順之助

六月十四日の東京体育館。第五回世界女子バドミントン選手権（ユーバー杯）チャレンジラウンドで、日本がインドネシアをくだして〝女王の座〟防衛を決めたとき、今井監督は喜びをかみしめながら「タイトルを守り続けることを考えねばいけない。三年の次回大会は、いまの若手でタイトル防衛をめざす」と静かにいった。

バドミントン女子の第一線はいま新旧交代期にきている。今大会に出た四人のうち、エース高木が二十六歳、天野が二十五歳。外国ではミセス選手の多い女子バドミントン界だが、日本の国情からしてこの二人に三年後を期待するのは無理。となれば、このアナを埋める新人の台頭がタイトル防衛の必須条件といえる。

バレーボールや卓球には、新旧交代期に第一線戦力の〝断絶〟があって〝世界の女王〟の座を追われた。バドミントンに、その心配はないか。だが、今井監督は「うちは断絶はない。力のある若手が続いているから……」と自信を持っていい切った。相沢・竹中というフレッシュ・ペアが成長してきているためだ。



今世界選手権のチャレンジ戦を前に、今井監督はダブルスの選手起用で迷った。第1複の高木・湯木組は問題ないとして、第2複をキャリアのある天野・高橋にしようか、若いが爆発的な相沢・竹中にしようか——。

この両ペアは、ほとんど実力差がないからだ。だが、同監督は「日本が挑戦する側なら、若い力に期待する。しかし今回の日本は挑戦を受ける立場。守るにはキャリアのあるペアにまかせた方がよかろう」と、天野・高橋組を出した。

「これが守備のよいインドネシアでなく、攻撃型の英国が相手だったら思い切って若いペアを出したろう」ともいったが、これだけでも、このフレッシュ・ペアの力がわかろうというものだ。

相沢マチ子・竹中悦子はともに青陵女短大の二年の十九歳。いずれも身長1m63。高木主将も「長いリーチを生かしての攻撃が鋭い。従来の日本にはない攻撃型のペア」という〝若い力だ〟。

（次ページへ）

期待される二人の素材

第四回ユ杯監督　小宮淳宏

高橋……湯木



相沢は打ちおろすスマッシュが鋭く、竹中は柔軟なからだを生かしての攻守の動きがよく、スマッシュのスピードは馬力でNo.1の湯木さえ一目置いているほど。シングルでも十分に使えるプレーヤーなのだ。

しかも、二人は〝かわい子ちゃん〟。このペアがモデルになった今世界選手権のポスターは張り出すと盗まれるという〝事件〟がひん発した。プレーがよくてかわいいというので、ポスター収集マニアの目に止まったのだろうが、これは、このペアにスターとしての要素が十分あることを物語っている。

国内でのマイナー・スポーツから、メジャー・スポーツへのし上げ——これがバドミントンの悲願。

実現するのに、この二人のスターをよい意味で利用するのも一つの方法だろう。今井監督も「このフレッシュ・ペアをバドミントンの普及とユーバー杯保持の決め手にしたい」といっていた。

前回のユ杯戦で私が高橋をダブルスに起用したのは、高木、横山、横井という偉大なシングルスプレイヤーを持っていたことの他に二、三の事情がありました。高塚の負傷、高橋の盲腸炎などのアクシデントがそれに輪をかけて、チームの編成の条件をきびしいものにしましたが幸いに天野、後藤がそれぞれ独自に持っていたすぐれた天分にささえられて目的を達成することができました。

高橋は与えられた立場を忠実にこなし、その後も引続き成長して、本年の全英では優勝してもおかしくない立派な内容のプレーを見せましたし、ユ杯戦では天野から「高橋と組んでこんなに安心してプレーが出来たのは初めてだ」といわれるほどになりました。けれども私はどちらかといえば彼女はシングルスのプレーヤーであると思っています。

高橋がバドミントンの技術の壁にぶつかるごとに、その悩みを何時でも社会的な人間的なことがらと関連させて苦しみ、一見のんびりしたなかでねばり強く競技と人間の幅を拡げて来た過程を見るとき、彼女が本物のバドミントンを目指していることがわかります。

湯木博江は大変に幸運なプレーヤーであります。あのキャリアで日本選手としては初の全英チャンピオンになった事だけでもそれがいえるでしょう。

今回のユ杯戦では失敗をして「あれは湯木ではない。全然別人がプレーしているようだ」と観戦者を口惜しがらせました。

けれどもこの子は幸運だけでなく大変に見事で大きな素材であります。アメリカの名手ハッシュマンを上まわる成績を残す力を持っていると思います。

バドミントンは個人の競技であり、コートの上で全人格をぶっつけ合うものであるところに価値がありますが、彼女の苦しみと成長は全く今後にあるのでしょう。ユ杯戦での失敗もそれらのほんの一部分として受け入れて欲しいものです。

「毛利先生の指導の通りに練習すれば良かった」、「何も考えずに高木について行けば良かった」時代は過ぎました。これからは何事も自分で考え、自分で決着をつけることをしなければなりません。

全英の帰途香港で高木と対戦した時の「もう私には勝たせないぞ」という気迫は良かった。練磨された見事な素質と併せて是非大成して下さい。

★　★　★

〝カッコいい〟と日本語の声援も

バトミントンの国際競技会といえば、つきものの名物がインドネシアの応援団。

この前のトマス杯が同じ東京体育館で開かれたときも、熱狂的な応援がもとで、新聞の社会面をにぎわす〝事件〟がもち上がっている。

今回も、在日の留学生を中心にする多数の応援団が、連日、スタンドを活気ずけているが、なにしろ、この人たちのほとんどが日本語ペラペラ。

なかには「カッコいい」「もうれつ」などという〝流行語〟まで、飛び出すしまつ。

この応援団の一人に聞くと、「ぼくらの応援ね、ユーバー杯をアジアから持って行かせたくないため、やってるのよネ。日本強い。インドネシアは勝てないと思うよ。でも、それでいいんだ。日本が優勝すれば、カップはアジアのもの。アジアはひとつ、よ」

やはり、インドネシアの白人に対する〝対抗意識〟は相当なものだ。

（東京新聞）

審判の目

福井正康

ユ杯の審判として宮永君、小島君、須田君らといっしょに何回か審判台に坐ったが、いつやってみても、あまり気持ちのいいものではない。

身についているはずの審判用語も、審判台に坐ったとたん、つい忘れがちとなる。とくにチャレンジ・ラウンドではマイクの調子が悪かったが、こんなちょっとした不安が、そのままジャッジやコールにひびくもの。

われながら、こんなことでは情けないのだがこれが実情だ。

インターゾーン決勝、第二試合のとき。インドネシアのウタミがなかなかサービスの練習を止めず、イライラした相手のニールセンが目顔で私に訴えた。

やむを得ず「ウタミ、練習をやめて」と、一声高く注意したが、途中またもウタミのこの作戦でシャトルの変更を強いられた。

「自分はそのシャトルでかまわない。なぜ変えるのか」とニールセンはどなっていたが、ウタミは相変わらず〝知らぬ顔の半兵衛〟さん。さっさと自分でシャトルを変えて（人の模範となるプレーヤーは、決してこのような無作法なことをしてはいけませんよ）しまった。

カッカしたニールセンは、このせいで？自滅、大事な一戦を失った。あとで聞くとウタミは全然、英語がわからないとのこと。これでは、おこった方が負けだと思ったが、アトの祭り。

これで思い出すのは三年前、所はニュージーランドのナピアユ杯初出場の日本が強豪インドネシアと対戦したときのこと。高橋とも子選手のガットが切れてしまったが審判は気がつかず試合を続行させようとした。

とたんに一声「ガットが切れています」高橋ば堂々と日本語で話すときょとんとした主審をしり目に、かわりのラケットを取りに戻ってきた。

リードされていた試合が、これをきっかけに逆回転、日本は貴重なダブルスでの1勝をあげたのである。私にとってはともに印象深いシーンであった。

（早大OB）

OBの目

杉田博

「13－5」――のスコアを電光板が示し、満場異様な興奮状態である。

チャレンジ・ラウンド、第二ダブルスで天野・高橋組が第1ゲームを取り、第2ゲームのとき。

ベンチでは高木が湯木の背に顔をかくし、祈るようにしている。試合が見ていられないようだ。

この光景に目がしらが、ジーンと熱くなってしまった。

だれもが一刻でも早くマッチ・ポイントを握って試合を決めてほしいと思っていたにちがいない。

ユーバー杯防衛、ほんとうにおめでとう。

そして長かったこの日まで、ほんとうにご苦労さまでした。

私たちが勝つと信じていただけに監督、コーチ、選手全員がそれを重荷に感じていたことでしょう。

各国に優秀な選手、個性のある選手がかならずいて、よいゲームを見せてくれた。アメリカのバリナガ、タイのカエントンイギリスのボグゾール・ウェトナール組や若いペリン、インドネシアのミナルニ等々……。

しかし日本の総合力の前には個人プレーは通ぜず、結果としてはスコアーの上で楽勝ということであった。

高木を中心に若い選手の力が加わりはしたものの、インドネシアの若い選手層を見ると、つぎの機会には相当の苦戦となるのは必至で、若手が大いに経験を積むべきであろうと思う。

湯木にして、トップ・シングルであれだけかたくなったのであるから、高木主将の存在は実に大きかった。

高橋は思いきった運びでウタミを降し、ダブルスにおいても天野の果敢なプレーとあいまって、のびのびプレーしていたのが印象に残る。

シングルスではミナルニの試合への闘志、ダブルスではイギリスナンバー・ワン組のサーブのうまさと、ウェトナールの返球の絶妙さは今後大いに見ならいたい。

日本は、ことにダブルスは長期計画でコンビの良いものを作らねばならないと思われる。

（横浜国大OB）

▽△　▽△　▽△

総裁妃殿下とユ杯

〝スポーツ妃殿下〟と、スポーツ各界から慕われ、親しまれておられる秩父宮妃殿下は、ユーバー杯でも大会名誉総裁。協会が五年前のトーマス杯にご推戴申し上げて以来今大会にも連日ご臨席いただいた。

大会後のレセプションでは各国選手と親しく話し合われ名だたる選手のほとんどをご記憶。

観客席でも各国大公使やご夫人にみずから手をさしのべられて流暢な英語でごあいさつ、国際親善にも大いなるご活躍ぶり。



その昔、妃殿下がカナダの大学にご留学中はテニス、バスケットボール選手として大いに鳴らされた由。

「日本バドミントンには大きな味方がついている」とバドミントン雀たちは大よろこびである。

ご説明役に立った広田兼敏副会長も思わず「ウーン」とうなるほど専門的なご質問でとりわけダブルスとシングルプレーの特徴や戦法に深い興味を示されたとか。

本田会長、広田副会長ともに感嘆しきりだったが、それもそのはず。

〝〝〝〝〝各国選手はこう語る〟〟〟〟〟



青い目 黒い目

わたしも ひとこと

ミナルニ選手（インドネシア）

日本はパワー、スピード、スタミナの三拍子そろって申しぶんのないチームだ。私自身のコンディションはよかったが、ダブルスはパートナーのレトノさんが左ヒザを痛めていたので、負けは止むを得ない。

しかし、私たちの国には今回のメンバーと同じ実力の選手が多く、たちどころに六チームぐらいつくれる。しかも、みんな若い。

これで国際経験さえじゅうぶんなら、近い将来、日本をしのぐことができるのだけど。

ボグゾール選手（英国）。チャレンジ・ラウンドの試合のすさまじさには、びっくりした。

ひとくちにいうと、日本やインドネシアは〝チームのため、お国の名誉のため〟に戦っている感じ。その気迫には敬服しますが……。

私たちのバドミントンは〝自分のため〟で、それも〝楽しむため〟という考え方。しかし、ユ杯の栄冠を目指すなら、やっぱり、もっと執念に徹しなければ、いけないのかもネ。

P・パタボンス選手（タイ）

一生けんめいやったが、とても、とても。インドネシアが強いと思っていたが、日本はそれ以上に強く、おそれいった。

私たちの国には約一万五千のプレーヤーがいますが、女性は結婚すると、ほとんど家庭にとじこもり、スポーツする機会がない。

それが発展をさまたげる一つの大きな原因になっていると思います。日木の事情はよくわかりませんが、これだけの強い選手をそろえられるのは、本当にうらやましい。



シャトルにも苦心

関係者がもっとも気をもんだのが、かんじんのシャトル。国際公認球はイギリスのRSL球しかないので、二月に九十六ダースを船便で注文したのだが、途中、港湾ストなどで五月末になっても未着。あわてた大会本部が、急ぎ航空便で追加注文したため、大会本部には最初注文した数の倍近い百六十八ダースという膨大な量が届いた。

しかもバドミントンのシャトルは重さによって十二種類もあり、気温が上がり、湿度が下がるほど、軽いものが使われる。

日本の六月の標準は78グレーン（1グレーンは約4分の1グラム）のシャトルだが、気候の変化によって、77グレーンの軽いシャトルが使われたり、79グレーンの重いのでないと、うまく飛ばなかったりする。

このため、今回も77―79の三種類をまとめて注文したので、実際に使われる数の約六倍のシャトルが集まったわけ。「ふんだんに使って下さいよ」と役員は苦笑しながら気前のよさを見せていたが、このへんにこの競技独特の悩みがある。

（読売新聞）



親善試合も日本が圧勝

◉新人群が大活躍◉



◆札幌大会（17日・札幌市体育館、観衆千五百）

日本 2（単3―0 複1―1）0 インドネシア

▽シングルス

○相沢マチ子 2（11―5 11―5）0 ウタミ

○竹中　悦子 2（11―7 11―6）0 ヌルハエナ

○高木　紀子 2（11―1 11―3）0 ヘスティ

▽ダブルス

○相沢マチ子
　竹中　悦子 0（7―11 15―15）2 ミナルニ
　○
　高木　紀子
　天野　博江 2（15―15 5―5）0 ヌルハエナ
　ヘスティ

ユ杯終了後の十七日、日本チームはふた手に分かれ、福岡で米国と、札幌でインドネシャ相手に親善試合を行なった。

結果は、福岡班がダブルスで1セット（高橋・湯木組）を失なっただけで5―0の完勝。札幌班では〝本番〟出場のチャンスをのがしたが相沢・竹中組が、運悪く？ミナルニ・ヘスティ組に当たって負けたほかは、日本が楽勝。4―1で順当な勝利をにぎった。

この相沢、竹中にしても、シングルスでは堂々と相手を圧倒しており、福岡では同じく本番にに恵まれなかったベテラン後藤、新進の本間・浦口組なども〝水を得た魚〟のように、さっそうとしたプレーを展開した。

これらの人々の経験は、かならず〝ユ杯3連勝〟への貴重な栄養となり、またバドミントン〝底辺拡大〟の力となることだろう。

両会場ともスタンドは満席で家族づれの姿もチラホラ。「ユ杯の味を満喫した。欲をいえば、せっかくのチャンスだから英国やタイのプレーも見たかった」と大好評だった。

◆福岡大会（17日・九電記念体育館、観衆二千）

日本 5（単2―0 複3―0）0 米国

▽シングルス

○湯木　博江 2（11―3 11―4）0 ルート

○後藤　和子 2（11―3 11―1）0 スターキー

▽ダブルス

○高橋とも子
　湯木　博江 2（15―15 11―3 15―6）1 レモン
　オニール

○本間恵美子
　浦口　恵子 2（15―11 11―10）0 ルート
　スターキー

○後藤　和子
　高橋とも子 2（15―15 10―9）0 レオン
　オニール

HATACHI
SHUTTLECOCKS
日本バドミントン協会公認
日本一の生産量を誇る
羽立工業株式会社
■本　社
静岡県浜名郡湖西町新所3 郵便番号・431-04
TEL　湖西〈05359〉6－1501　（代表）
■東京営業所
東京都台東区蔵前3-10-7 郵便番号・111
TEL　東京〈03〉861－2777　（代表）

□■□■ 次号予告

日本におけるバドミントンの本格的総合雑誌として、本誌では第二号から選手強化にあたっておられる方々に「バドミントン技術」の解説を執筆していただくほか、世界の情勢やスポーツ時事問題など巾広い編集を企画しております。

なお、第二号はインターハイおよび、マニラで行なわれた第五回国際学生選手権大会の特集号として、両大会の熱戦の記録などを掲載します。ご期待下さい。

【主な内容】

▼特集1　インターハイ
①大会からグラビアと記録
②優勝校、優秀選手プロフィール
▼特集2　国際学生選手権
日本選手の活躍ぶりとその将来を観察
▼特集3　技術解説
初級（中学生）から上級（大学生）までのバドミントン技術解説
▼名選手訪問（インタビュー）
▼各県No.1クラブ紹介
▼IFだよりと協会事務局から
▼学連、実業団、教職員のページ
▼時評欄
①バドミントン時評
②マスコミの目
③スポーツ時評ほか
トピックスなど

■表紙■

一九五六年、かっての全英選手権者H・S・ユーバー夫人（英）から寄与された。

ユーバー夫人みずからデザインした、このトロフィーは高さが18インチ（45センチ）で銀製。

回転する地球の上に、シャトル・コックがのっており、その上に、ラケットを手にした美しい女子プレーヤーの像がある。

台の周囲には「世界女子バドミントン選手権トロフィー。H・S・ユーバー夫人より贈られる。一九五六年」と英文で刻まれている。

また、この台の一番下には、小さなワッペン型で、優勝チームの名を刻んだ金属板が張りつけられており、ご承知のようにまず米国が三枚、そして66年、69年と輝く「JAPAN」の名が二枚。

大会は三年ごとに行なわれるので、このワッペンがひとまわりして、いっぱいになるには、ミントン選手権トロフィー。H一世紀（百年）かかるという。

★★★★

■□■□ 編集後記

積年の懸案であったことが、急に解決されることになって、こんた喜ばしいことはないと思うとともに、あれもこれもと考えているうちに発刊となりました。

全世界を湧かせたアポロ11号のテレビ・ニュースを聴取しながらこの刊行も内容において処女地探険の心意気で新しいものを求め続けたいと決意しております。

（小飼）

■■■

発刊に思うこと三つ

一つ、不備不行届きは不勉強がなせる業。

一つ、どんな小さな人の気持にも心を配ろう。

一つ、自分のモノサシで他を計らないこと。

終わりに面白くためになるグッド・アイデアをどしどし教えて下さい。

（竹尾）

■■■

ユーバー杯の防衛が、大きな刺戟剤となって『バドミントン界』の発刊につながりました。

資料集めから写真の手配——とまったくあわただしく、そのわりに発刊が遅延したのはインター・ハイや日韓高校がはさまったからで、次号からはこんなことのないように充分な配慮をするつもりです。

この『バドミントン界』が、こんごどのように育って行くかは、読者諸賢のご叱声とご支援にかかっていると思います。

そしてまた中央集権にならず地方で育つ若い芽が、より強くなって行くさまを、あらゆる機会にとりあげたいと思います。ご声援下さい。

（新沢）

■■■

ことしも台風シーズンがやってきた。そして秋——。スポーツの秋だ。お隣りの韓国ではバドミントンのラケットを五万本も日本に発注したという。

シャトルを追う人たちもどんどん増えつつあるわけだ。

次号は創刊号とガラリと趣向を変えて、シャトルを追う人のために実際に必要で有意義な内容にしたい。

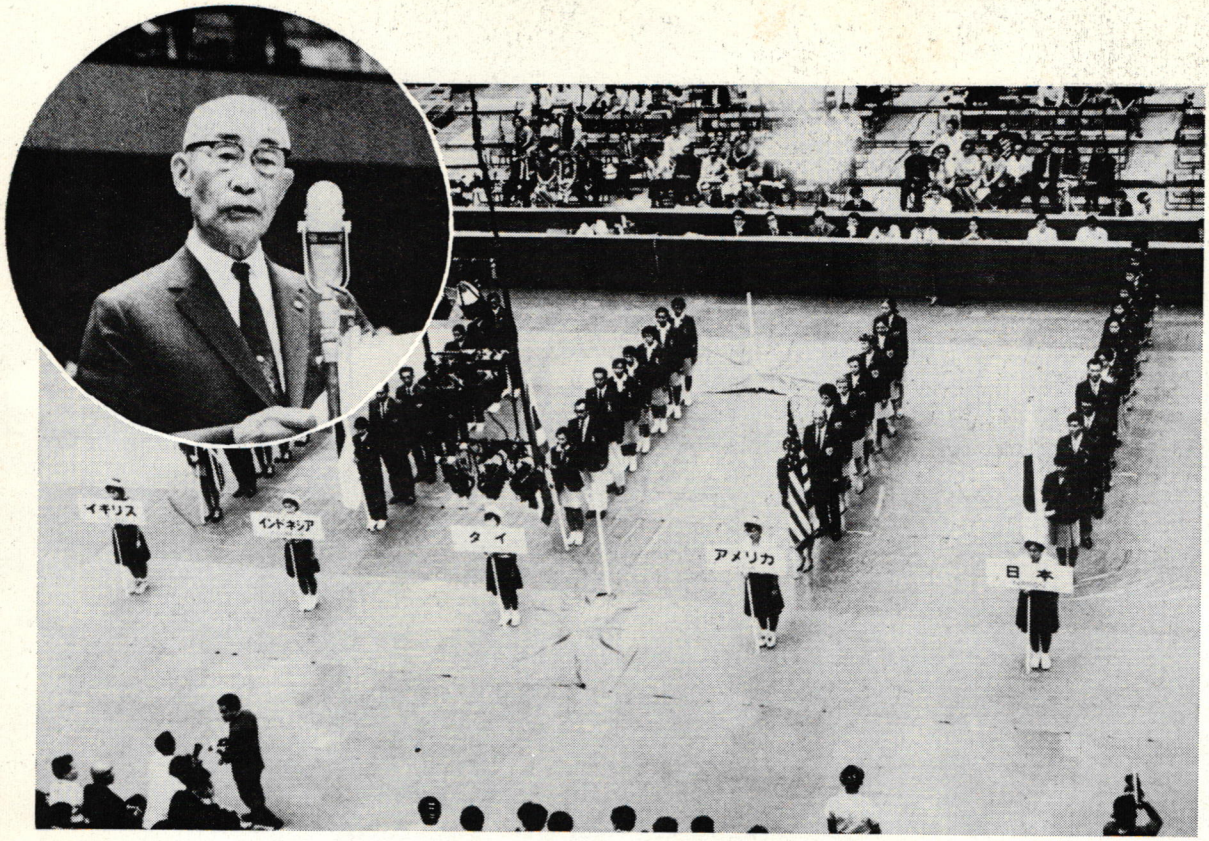
東京運動記者クラブ・バドミントン分科会の多くの記者諸氏から絶大な支援を頂戴したことを付記し、深謝します。（奏）

バドミントン界、創刊号

昭和44年8月25日　印刷
昭和44年8月31日　発行

編集兼発行人　川端　昇一
発行所　東京都渋谷区神南町25
岸記念体育会館内
日本バドミントン協会
電話467・3111（内線）251
467・7095（直通）
郵便番号・150
振替口座・東京32193
印刷所　東京都江東区永代1の5の2
有限会社　和田印刷所

定価　一部　百円





スポーツ競技の式典には〝二つの顔〟がある。

ひとつは国歌、国旗などの存在に代表される厳粛な顔。もうひとつは、音楽と色彩と、そして選手の品定めなどができる、陽気な顔である。

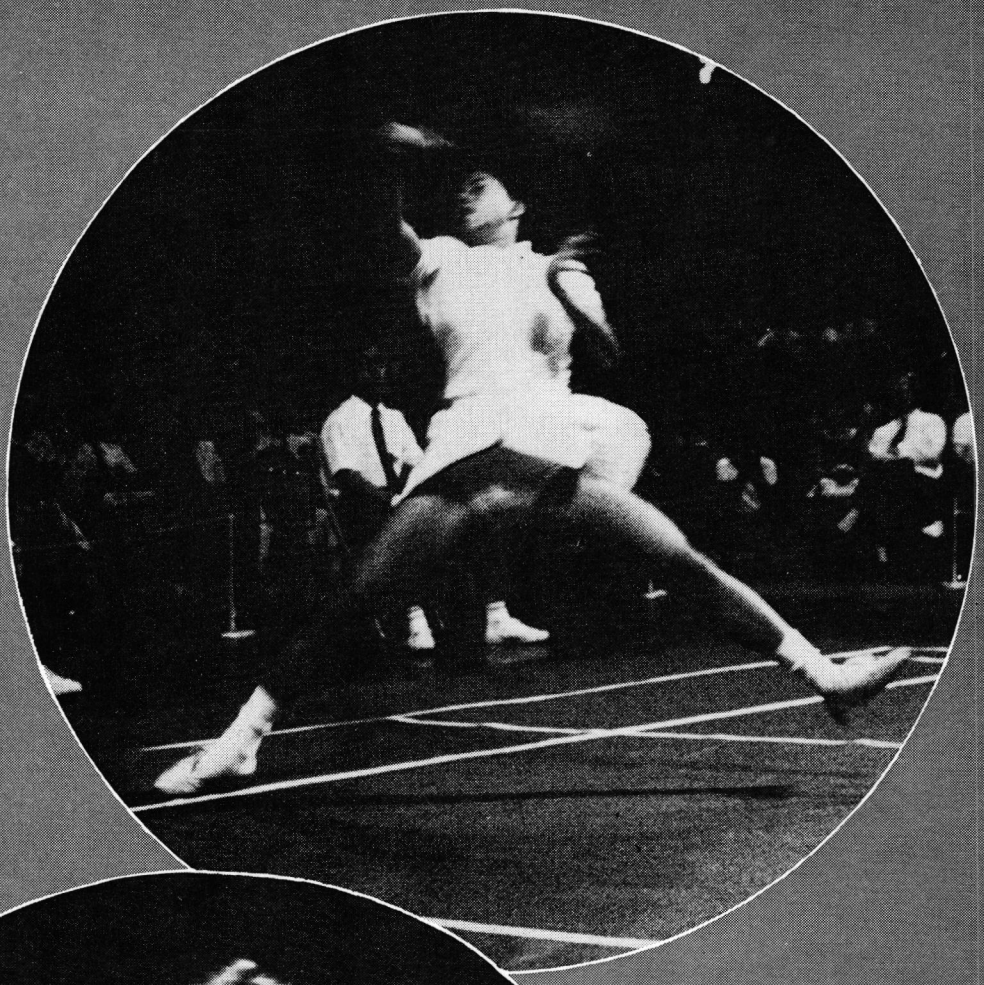
オリンピックの入場行進などで、最近、女性旗手の起用がさかんになっているが、これは〝陽気な顔〟の演出効果を高めようという意識が働いているからだろう。

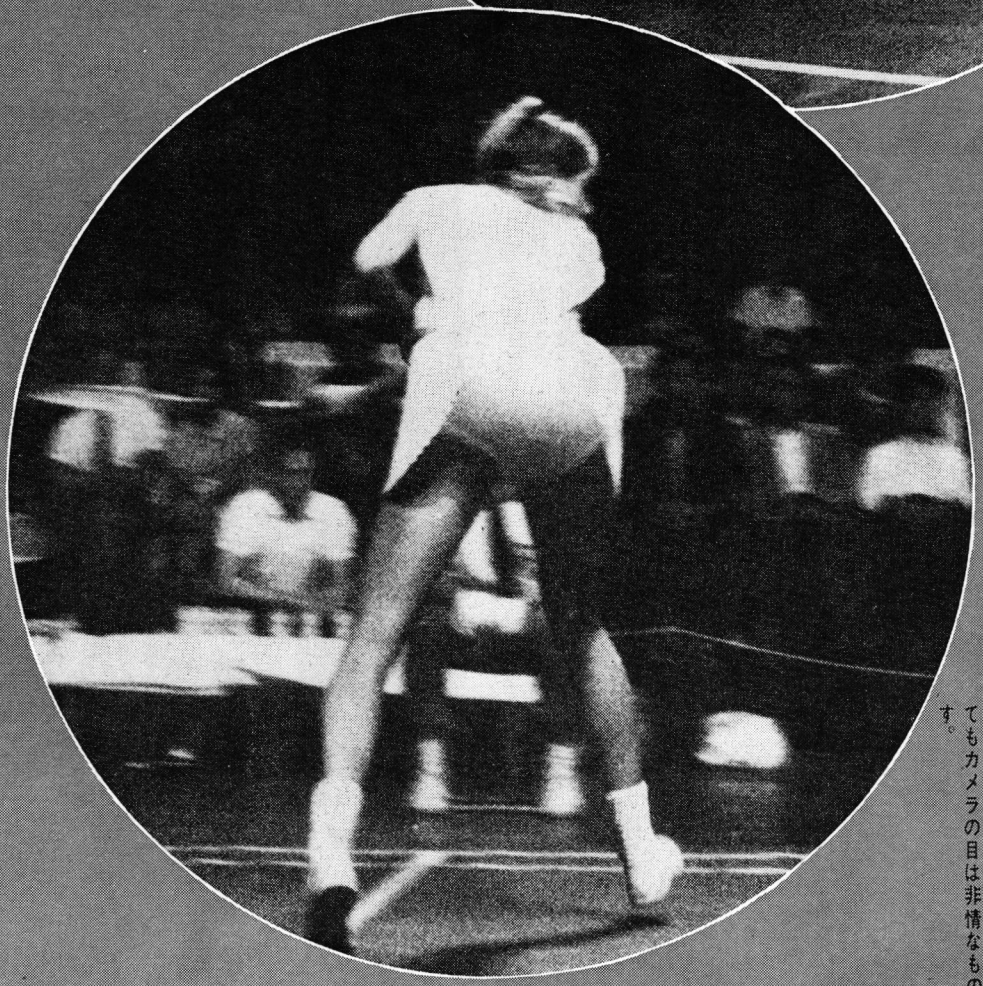
幸か不幸か？ユ杯はこれ、オール女性。だが、やはり、そのなかで米英両国が、ひときわスラリとした美人をトップに行進したのは、心にくい。

「どっちがきれいか、よく見てネ」――入場行進も、やはり〝女のいくさ〟の一種か。



Oh! モオレツ

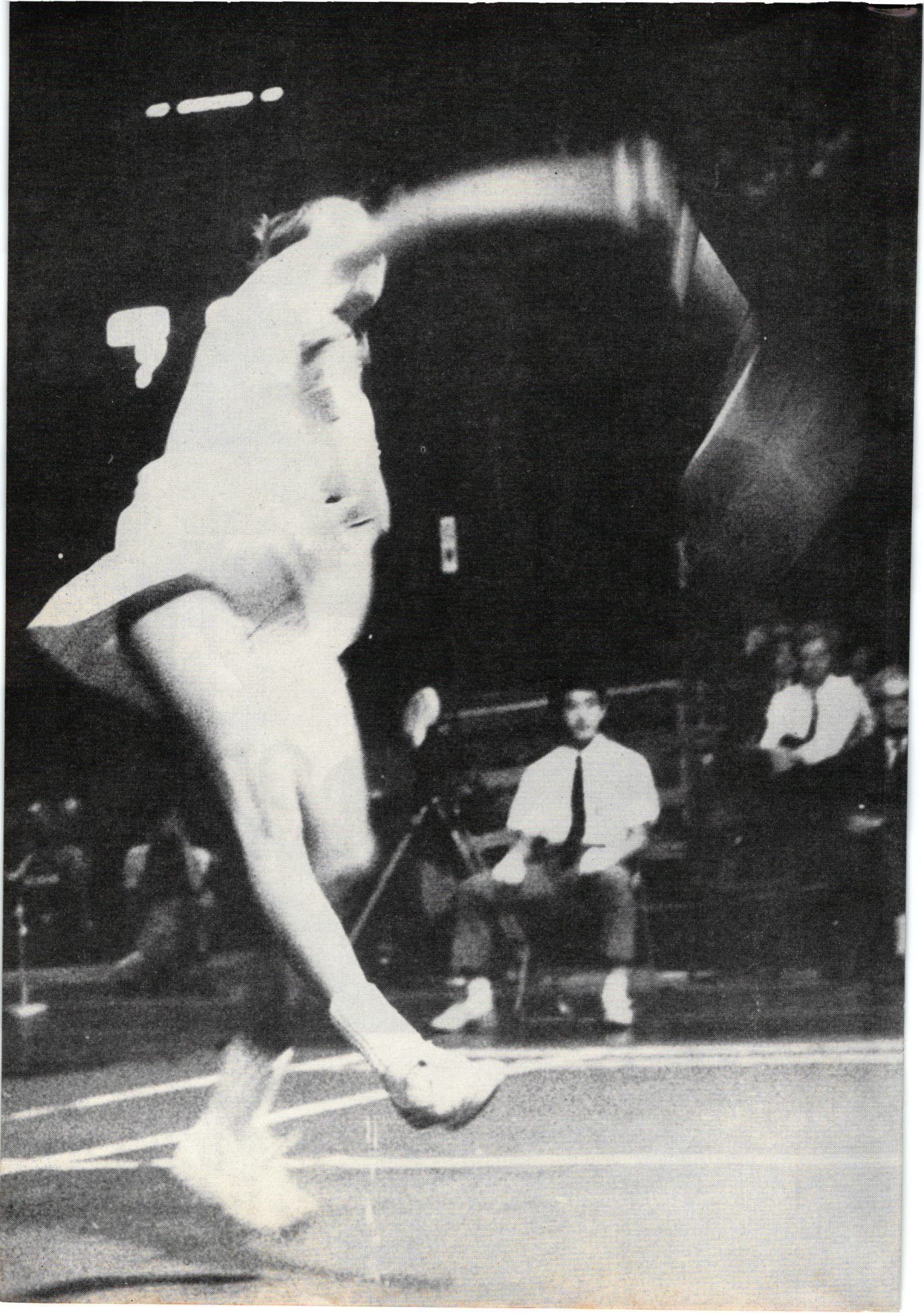




一瞬の動きが〝空飛ぶ白鳥〟のように優雅だから、おれはバドミントンが好きになった、と初めて試合を見た〝自称詩人〟がいっていた。

だが、それは見るものの目に優雅だと映るだけであって、選手ご当人は、終始〝勝つために は、なりふりかまっちゃおれない〟心境にちがいない。

その勝負にかけた執念や根性を、絵に表わすと……それにしてもカメラの目は非情なものです。









こんどの大会では、開会前と終了後と、二度、親善パーティが開かれた。

スポーツに国境はなく、音楽にも国境はなく、そして、目は口ほどにモノをいい、ことばは通じなくとも、心は通い合う。というのが、パーティのいいところだが、もうひとつ、国境がないものがある。それは食べもの。ヤキトリ、スシ、テンプラ、おお、ベリ・ナイス。ワンダフル。

ほれ、むかしから〝同じカマのめし〟というじゃないですか。

N.B.I. の C.M. BRAND



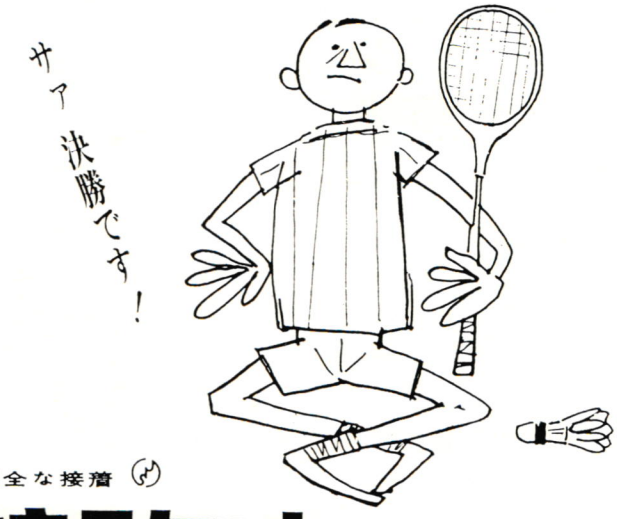
バドミントンの気品
ＣＭの風格

!!ご存じですか!!

★ 我国でシヤトルコック製法を一番先に機械化して水鳥シヤトルを普及したのはＣＭです。
★ Ｎ.Ｂ.Ｉはバドミントン普及発展のために製造から直売システムです。
★ 現金でお申込になれば卸価格でお求め出来ます。

日本バドミントンインダストリ株式会社

東京都三鷹市井ノ頭４－８－７　　ＴＥＬ　0422（47）3331(代)－３



K TOKYO KAWASAKI

素材の厳選　完全な接着

カワサキラケット

河崎ラケット工業株式会社

本　社　東京都台東区台東２－28－５

TEL （831） 9161(代)～3・6657・1884・0453

「バドミントン界」 創刊号 昭和四十四年八月三十一日発行

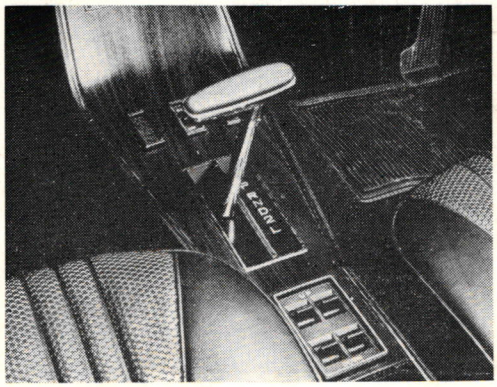
発行所 東京都渋谷区神南町二五 岸記念体育会館内 日本バドミントン協会

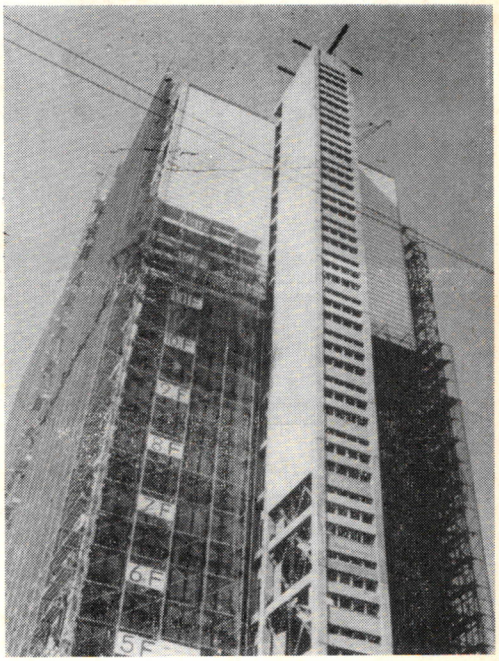
定価百円

SONY®

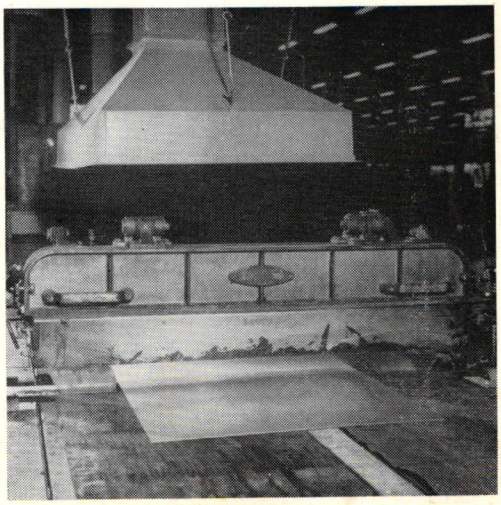
高性能接着剤

ソニーボンドマスター





ソニーケミカルはエレクトロニクスのトップメーカーであるソニー株式会社の化学部門を担当する会社です。米国有数の総合化学メーカーＰＰＧインダストリー社と技術提携し、その長年の経験を土台として卓越したソニーの技術と設備によって建築・車輌・船舶・航空機・化学工業・電子工業にとあらゆる産業に貢献する接着剤をはじめ各種の化学製品を製造し、日本をはじめ東南アジアの各地へ供給しております。



ソニーケミカル株式会社

東京　東京都大田区東糀谷５－23－14
Tel. 営業事務所 (742)3441(代) 工場 (742)4641(代)

大阪　大阪市北区西堀川町18番地 高橋ビル東館10階
Tel. (363) ２０７１～３